移動生活様式。
定住生活様式。
社会間の性差の起源。

IWAO OTSUKA

移動生活様式。
定住生活様式。
社会間の性差の起源。

IWAO OTSUKA

目次

移動生活様式。定住生活様式。社会間の性差の起源。

大塚いわお

一口説明。

基本的食糧。基本的生活様式。移動生活様式や定住生活様式との関連。

生物にとっての食糧。それは、以下の２つへと、分類される。
（１）
基本的食糧。生物は、それを食べないと、死んでしまう。生物は、それが欠乏すると、死んでしまう。炭水化物。タンパク質。脂質。ビタミン類。ミネラル類。それらを含有する食物。
（２）
付加的食糧。生物は、それを食べなくても、特に死なない。生物は、それが欠乏しても、特に死なない。菓子。嗜好品。

生物が、基本的食糧を、確実に、一定量以上、定期的に確保すること。そのために必要な生活様式。それは、以下のように呼ぶことが出来る。
基本的生活様式。
その内容は、生物の周囲を取り巻く自然環境のタイプに依存する。

自然環境の分類。
（１）
湿度。乾燥。湿潤。
（２）
温度。高温。中温。低温。

基本的生活様式。陸上で生活する生物の場合。

（１）
湿潤環境の場合。生物にとっての基本的食糧は、植物の実や茎や根や幹や葉や花などである。植物の栽培。農耕。それは、生物に、定住生活様式をもたらす。
（２）
乾燥環境の場合。生物にとっての基本的食糧は、動物の乳や肉などである。動物の飼育。遊牧と牧畜。それは、生物に、移動生活様式をもたらす。

基本的生活様式。その内容は、気候変動による、自然環境の湿度や温度に変動が起きない限り、引き続き、有効であり、存続する。
基本的生活様式。その内容は、生物における文明の発達や発展によって、生物が高速移動手段を獲得した場合においても、引き続き、有効であり、存続する。
基本的生活様式。その内容は、気候変動によって、自然環境の湿度や温度が変動すると、それに伴って変動する。
基本的生活様式。その内容は、生物の活動が引き起こす気候変動によって、自然環境の乾燥性や湿潤性が変動すると、それに伴って変動する。

（2021年12月初出。）

移動生活様式、定住生活様式と、生活文化面での流動性、固定性の違い

移動生活様式者は、生活文化面での流動性が高い。移動生活様式者は、生活文化面での固定性が低い。
定住生活様式者は、生活文化面での流動性が低い。定住生活様式者は、生活文化面での固定性が高い。

（初出2020年5月）

移動生活様式と定住生活様式。それらの原初形態。それらの交通通信発達後の形態。

（０）
問題意識。

ある人が、彼自身は、移動生活様式者なのか、それとも定住生活様式者なのかを、正しく自己判定すること。
それは、とても難しい。

例えば、西欧エリアにおいて、住んでいる人たちには、以下のような意識が薄い。
「私たちは移動生活様式者の側に属する。」
彼らは、彼ら自身のことを、定住生活様式者だと思っている。

彼らは、以下の内容の観念が強い。
彼ら自身が、コミュニティを生成して、そこに定住していること。

一方、筆者は、彼らを、移動生活様式者と見なしている。

そのため、筆者の文章の内容は、そのままでは、彼らには理解されない。

彼らの概念を直輸入している、日本のような定住生活様式者。
そうした定住生活様式者からも、筆者の文章の内容については、そのままでは、意味の理解がなされない。

何が、移動生活様式で、何が、定住生活様式かの、もう少し踏み込んだ定義が必要である。
移動生活様式と定住生活様式とについて、世界比較が必要である。

西欧は、移動生活様式者の社会であるということ。
その自覚を、西欧人に持ってもらうこと。
そのためには、どういう根拠を示せば良いかを見出すこと。
例。仮に、人々が、同一箇所に居住している場合。
人々が、日常的に放牧や牧畜を行っているのであれば、彼らは、移動生活様式者である。

農業以外の、様々な産業への従事者をどう見るか?
例。工場労働者。オフィスにおける管理職。
彼らは、交通通信発達後の社会的存在である。

交通通信機関による、以下の目的のための、日常的な移動。
通勤や通学。ビジネス上の打ち合わせ。観光。
そのことを、どう見るか?

自家用車や電車やバスや航空機やネットなどによる移動の日常化。
そのことを、どう見るか?

交通通信機関の日常的な利用者は、移動生活様式者だけでなく、定住生活様式でも普通に見られる。

筆者は、上記の問題を解決するために、以下のような概念を導入する。

（1）
////
移動生活様式度。移動生活様式を行っている度合い。
例。生活上、遊牧や牧畜に頼る度合い。
//
定住生活様式度。定住生活様式を行っている度合い。
例。生活上、農耕に頼る度合い。
////

移動生活様式度と、定住生活様式度とは、相対的な尺度である。
二つの社会文化を相互に比較すること。
そのことで、どちらがより移動的で、どちらがより定住的かを、知ることが出来る。
例。
アメリカと中国との比較。
アメリカは、移動生活様式度において優位である。
中国は、定住生活様式度において優位である。

（2）
////
原初形態。

//
交通通信発達後の形態。
////

移動生活様式と定住生活様式の差の分析。
それは、原初形態と、交通通信発達後の形態との二通りに分かれる。

（２－１）
原初形態。
それは、交通通信発達以前の、自然環境への直接的な適応のために、
人々が取る生活行動である。
それは、以下の差に基づく。
（２－１－１）
先天的な男女の性差。
女性が、男性に比べて、より定住的であること。
女性が、男性に比べて、移動を苦手とすること。
例。
女性が、男性に比べて、移動に不便な靴を、わざわざ好んで履くこ
と。
女性が、男性に比べて、自動車の運転が、下手なこと。
女性が、男性に比べて、空間移動に必要な地図の読み取りが下手なこ
と。

（２－１－２）
後天的な生産様式の差。
生活必需品や生活必需設備の生産様式の差。
例。
食料や衣類や住居等。

農耕は、遊牧や牧畜に比べて、より定住的であり、移動を苦手とする
こと。

（２－２）
交通通信発達後の形態。
交通通信発達後、以下の状況が頻繁に起きている。
////
移動生活様式者の間で、定住行為が頻繁に見られること。

例。テレワーク。
//
定住生活様式者の間で、移動行為が頻繁に見られること。
例。高速列車への乗車。
////

（３）
物理的移動。心理的移動。
物理的定住。心理的定住。
２×２次元の分類。
////
物理的には定住しているが、物理的には移動している場合。
//
物理的には移動しているが、心理的には定住している場合。
//
物理的には定住しており、心理的には定住している場合。
//
物理的には移動しており、心理的には移動している場合。
////

物理的な移動生活様式者。心理的な移動生活様式者。
物理的な定住生活様式者。心理的な定住生活様式者。
２×２次元の分類。
////
物理的な移動生活様式者。心理的な移動生活様式者。
例。
砂漠地帯の伝統的な遊牧民。
交通通信機関の発達した、牧畜ベースの社会の都市住民。
//
物理的な移動生活様式者。心理的な定住生活様式者。
例。
交通通信機関の発達した、稲作農業ベースの社会の都市住民。
彼らは、交通通信機関を使用して、以下のような行為を行う。
以下のような人々に、会いに行くこと。
同一企業定住集団や、同一学校定住集団。
その、地理的に離れた、他のメンバー。
部外者として、地理的に離れた他の定住集団へと営業に行くこと。
彼らは、交通通信機関を利用して一時的な旅行をした後、程なく、もとの定住集団に戻ってくる。

//
物理的な定住生活様式者。心理的な定住生活様式者。
例。
交通通信が不便な、稲作農業ベースの村落。
彼らは、徒歩で、同一企業定住集団である、村落のメンバーに会いに行く。
死亡率の高い感染症が流行中の、稲作農業ベースの社会の都市住民。
彼らは、ネットを利用して、以下のような人々に、会いに行く。
同一企業定住集団や、同一学校定住集団。
その、地理的に離れた、他のメンバー。

彼らは、ネットを利用して一時的な旅行をした後、程なく、もとの定住集団に戻ってくる。
//
物理的な定住生活様式者。心理的な移動生活様式者。
例。
一箇所に居住しながら、日中あるいは数日にわたって放牧を行うこと。
そうした、牧畜農業ベースの村落。
一箇所にとりあえず居住しながら、ネットで遠隔地間のグローバルなミーティングを行うこと。
そうした、牧畜農業ベースの都市住民か村落住民。
死亡率の高い感染症が流行中の場合。
////

（４）
極が存在する社会関係。極が存在しない社会関係。
（４－１）
極が存在する社会関係。
（４－１－１）
パーティー。
それは、以下のような内容である。
////
人々のまとまり。極。
人々による、一時的な連れ立ち。
人々による、一時的な手つなぎ。
気軽にジョインすること。
臨時の御一行として行動すること。
一時的に同行すること。

簡単に解散すること。
////

それは、以下の性質を持つ。
////
内外の区別が薄いこと。
対人関係において、バラバラであり、自由があること。
移動すること。
//
気体的であること。
////

移動パーティー。
それは、以下の人々の間で、良く発見される。
////
移動生活様式者。
男性優位な人々。
////

移動パーティーについての、詳しい分類。
////
各部自律型。
パーティーを繋ぐ手が切れやすいこと。
中小の程度のサイズのパーティーが、それぞれバラバラに、自律的に、動くこと。
例。イギリス。
そこでは、パーティー同士の切り離しが起きている。
それは、海水によって、周囲から切り離された島国的性質である。
//
全体明晰視型。
パーティーを繋ぐ手が切れにくいこと。
大規模な、国家サイズのパーティーが、容易に形成されること。
パーティー全体の見通しが良いこと。
例。フランス。
それは、陸地続きの大陸的性質である。
//
定住要素加味型。
パーティーと、集団との、中間形態であること。
ややパーティー寄りであること。

定住の度合い。
それが、上記の二類型に比べて、高いこと。
社会全体の調和を求める度合い。
それが、上記の二類型に比べて、高いこと。
例。ドイツ。
////

移動パーティーは、定住生活様式者にとって、憧れの的である。
定住生活様式者は、定住集団の生活における、不自由さや理不尽さに辟易している。
例。
日本人が作る異世界転生タイプのアニメやネットワークゲーム。
そこでは、登場人物たちは、必ずパーティーを作って、自由を謳歌する。

移動パーティーについての、その他の分類。
////
企業パーティー。
学校パーティー。
地域パーティー。
国家パーティーは、企業パーティーの一種である。
友人パーティー。
////

（４－１－２）
集団。
それは、以下のような内容である。
////
人々の群れ。極。
そこでは、行為者にとって、以下の行動が必須であること。
//
中に入ること。
内側に入ること。
////

それは、以下の性質を持つ。
////
群れの内外の区別や差別。
それらが强固であること。

//
内部調和の原則。
終身加入の原則。
解散無しの原則。
//
対人関係において、不自由であること。
//
液体的であること。
////

定住集団。
それは、以下の人々の間で、良く発見される。
////
定住生活様式者。
女性優位な人々。
////

定住集団についての、その他の分類。
////
企業定住集団。
学校定住集団。
地域定住集団。
国家定住集団は、企業定住集団の一種である。
血縁定住集団。これは、定住生活様式者だけでなく、移動生活様式者においても、見られる。
////

（４－２）
極が存在しない社会関係。
ネットワーク。
////
定住ネットワーク。
定住生活様式の対人関係において、相互の調和を指向しつつ、ネットワーク状に開いたタイプ。
例。東南アジアのタイにおける血縁関係。
//
移動ネットワーク。
移動生活様式の対人関係において、グローバルで普遍的な広がりを指向しつつ、ネットワーク状に開いたタイプ。

例。移動生活様式者のインターネット。
////

（4－3）
////
コミュニティ。コミューン。
共同体。
ゲマインシャフト。
パーティーや集団やネットワークにおける、手つなぎや紐帯そのもの。
//
アソシエーション。
ゲゼルシャフト。
一定の特定の目的の達成のために結成される、パーティーや、集団や、ネットワーク。
例。
企業。資金稼ぎのためのパーティーや集団やネットワーク。
////

（5）
拠点の分散。
定住集団における、拠点の分散。
それは、交通通信発達に伴い、発生する。
同一定住集団のメンバー同士。
彼らが、それぞれ、以下の複数地点の間を、相互に行き来すること。
地理的に離れた、同一定住集団の多数の拠点の間。

（6）
居住の地点。労働の地点。それぞれの移動と定住。

仮に、人々が、同一箇所に居住している場合。
人々が、日常的に移動労働を行っているのであれば、彼らは、移動生活様式者である。
人々が、日常的に放牧や牧畜を行っているのであれば、彼らは、移動生活様式者である。

仮に、人々が、頻繁に旅行で空間移動を行っている場合。
人々が、普段は同一箇所に居住して、日常的に定住労働を行っている

のであれば、彼らは、定住生活様式者である。
人々が、普段は同一箇所に居住して、日常的に農耕を行っているのであれば、彼らは、定住生活様式者である。

（2021年9月初出）

移動と定住。生物における、それらの両立の実現と、社会の近代化と、世界的覇権の掌握。

（A）
生物にとって、空間移動は、必須である。
その要因。

（要因。その１。）
定期的な水分やミネラルの補給。
例。水飲み場への移動。塩の蓄積場所への移動。そのための定期的な移動の発生。
（要因。その２。）
定期的なエネルギーや養分や各種資源の確保。
例。食糧の確保。営巣資材の確保。そのための定期的な移動の発生。

食糧を、動物生物とする場合。
動物の獲物や家畜。それらへの追尾と捕獲と制御。そうした活動。
例。狩猟。漁業。遊牧。牧畜。

（要因。その３。）
空間移動するための、筋力や瞬発力。
外敵やライバルに打ち勝つための、筋力や瞬発力。
その定期的な増強や維持の必要性。
定期的な身体運動機能のトレーニング。
例。競技活動。マラソン。ジョギング。

それらの実現のための、走行。
そのことが引き起こす、物理的移動。
そのことが、毎日の日課になること。

長時間、連続して走行し続けること。
それは、生物にとって、不可能であること。
生物にとって、必ず、休止状態や停止状態の確保が、必要であること。

休止や停止。それらは、定住をもたらす。

移動能力を持つ生物は、定住状態の確保を、生活上、必須とする。
そのことの確保により、生物の生活は楽になる。
そのことの確保により、生物の生活水準は、向上する。

（Ａ－１）
その実現は、以下の内容の発明により、容易に、もたらされる。
植物栽培。農耕。

例。
欧米諸国からの視点における、生活や社会の進化。
狩猟から農耕へ。
移動から定住へ。

（Ａ－２）
定住状態を確保しつつ、生活における、恒常的な移動性を、実現すること。
長時間や長距離の移動を可能にすること。
乗り物を発明すること。
乗り物の上で、彼ら自身は、休止し、停止すること。
その実現は、生物にとっての、悲願である。

その実現方法。

（Ａ－２－１）
他の動物生物を、移動手段とすること。
そのことで、彼ら自身は、走行せずに済むこと。
そのことで、生活における、恒常的な移動性を、実現すること。
例。騎馬民族における、乗馬生活。モンゴル。

（Ａ－２－２）
機械の利用による、交通機関や、通信機関を、発明すること。

そのことで、彼ら自身は、走行せずに済むこと。
そのことで、生活における、恒常的な移動性を、実現すること。
例。鉄道や自動車の、日常的な利用。それによる、通勤や通学の実現。
例。高速ネット通信の日常的な利用。それによる、通勤や通学の実現。

ある社会において、（Ａ－２－１）の生活が、環境面で、不適切な場合。
例。日常の生活面における、農耕への依存度。それが、大きい社会。
そうした社会は、（Ａ－２－２）の生活を発明することで、初めて、大きく発展する。

例。
欧米諸国。
それらの社会における、近代化の進展の急速性。
その原因。

（原因。その１。）
新規の発明。
それは、生活における移動性が高いほど、容易になる。
その理由。
未踏領域への進出が、移動性の確保により、より容易になるため。

例。
欧米諸国。
それらの社会は、東アジア諸国に比べて、生活における移動性が、より高かった。
そうした移動性の高さ。
それは、中東諸国やモンゴルも、より高度に所有していた。

（原因。その２。）
機械の設置や蓄積。
それは、生活における定住性が高いほど、容易になる。
その理由。
機械。移動用の機械。機械を製造するための、機械。

それらは、重い。

それらは、場所を取る。
それらの稼働には、定住性の確保が必要となる。
それらの量産には、多くの手間と時間が掛かる。
それらの量産には、多くの人手を、集中的に必要とする。
それらの量産を実現するためには、社会における人口密度が、一定以上、高くなければならない。
（原因。その３。）
それらの量産は、社会における人口密度が、高いほど、容易になる。
それらの量産の成功。それは、産業革命である。

例。
欧米諸国。
それらの社会は、中東諸国やモンゴルに比べて、生活における定住性が、より高かった。
それらの社会は、中東諸国やモンゴルに比べて、生活における人口密度が、より高かった。

上記の結果。
欧米諸国。
それらの社会は、世界に先駆けて、産業革命と近代化に成功し、世界の覇権を、いち早く握った。
その他の社会は、産業革命と近代化において、出遅れた。

（Ｂ）
本拠の拠点。
例。営巣の中心地点。自宅の家屋。
例。所属する血縁集団や血縁ネットワーク。その中心地点。

それらの移動。それは、移動生活様式をもたらす。
そうした社会。それは、移動社会である。

それらの定着性や不動性。それは、定住生活様式をもたらす。
そうした社会。それは、定住社会である。

（Ｂ－１）
移動手段の発達。
その分類。

（Ｂ－１－１）
交通機関の発達。
そのことが引き起こす、遠隔地の血縁者や、企業のオフィスや工場や、学校に出向くための、物理的移動。
そのことが引き起こす、遠隔地への旅行。
それらのことが、毎日の日課になること。
本拠の拠点は、多くの場合、定住していること。

（Ｂ－１－２）
通信機関の発達。
そのことが引き起こす、遠隔地の血縁者や、企業のオフィスや工場や、学校に出向くための、ネット上での瞬間的な移動。
そのことが引き起こす、遠隔地へのネット接続やネット中継。
それらのことが、毎日の日課になること。
本拠の拠点は、多くの場合、定住していること。

（Ｂ－２）
本拠の拠点を、移動しながら、毎日の日課として、遊牧や牧畜による、移動生活様式を行うこと。
例。モンゴル草原における、遊牧。

本拠の拠点の移動を、毎日や毎週の日課とすること。

（Ｂ－３）
（Ｂ－３－１）
本拠の拠点は、定住しながら、毎日の日課として、遊牧や牧畜による、移動生活様式を行うこと。
例。欧米諸国における、放牧地への牧畜。

（Ｂ－３－２）
本拠の拠点は、定住しながら、長期間、出稼ぎや出張による、移動生活様式を行うこと。
例。各地の遠洋漁業者。
例。各地の商人が、諸国や、諸地方を、巡回して、商売をすること。

（Ｂ－３－３）
本拠の拠点は、定住しながら、各メンバーが、生涯をかけて、以下の行為を行うこと。
所属集団や所属ネットワーク。

それらの間の、空間的な渡り歩き。
それらの空間的な規模の、拡大。
その一環として、空間的な移動を行うこと。
例。
中国や韓国の巨大血縁集団における、メンバーの空間移動性や、空間的拡大性。
その実例。
華僑の海外進出と、全世界における共助ネットワークの構築。それらの成功。
それは、中国が世界の覇権を握ることに、繋がる。

例。
中国や韓国の巨大血縁集団における、本拠地の、空間的不変性や空間的不動性や定住性。
それらの永続的な維持。

（Ｂ－３－４）
本拠の拠点は、定住しながら、生計を立てるために、遠方に、長期に渡って、移住して、出稼ぎをすること。
例。東南アジアから、中東の産油諸国への、長期に渡る出稼ぎや移民。

（Ｂ－４）
流民化。
そのことが引き起こす、定住生活様式から、移動生活様式への変化。
例。日雇労働を行いながら、毎晩の宿泊施設を変更し続ける、流民。

流民化。その原因。

（Ｂ－４－１）
本拠の拠点を失うこと。
そのことが引き起こす、流民化。
例。拠点の家屋が、大洪水で流されること。日本における、大きな津波の被災者。

（Ｂ－４－２）
本拠の拠点を持つことへの失敗。
そのことが引き起こす、流民化。
例。日本における、新卒での正規雇用の機会を喪失した、非正規雇用

者。

（Ｂ－５）
本拠の拠点を、移転させること。
例。自国から他国への移民が、本拠の拠点を、出稼ぎ先へと移転させること。
出稼ぎの移動生活様式から、定住生活様式へ。

（Ｃ）
原初的な環境適応のための、基盤的な行動様式。
基本的食糧の獲得のための行動様式。
遊牧や牧畜。それは、移動生活様式をもたらす。
農耕。それは、定住生活様式をもたらす。

（Ｃ－１）
原初的な環境適応のための、基盤的な行動様式。
基本的食糧の獲得のための行動様式。
それらの内容の、後世への継承。
その結果。
原初的状態では、定住である場合。
仮に、後世になって、交通機関の発達に伴う移動が増えたとしても、その行動様式は、定住を踏まえたものになる。

その社会の根本的な仕組みは、その基盤的な行動様式を反映したものとなる。

（Ｃ－１－１）
原初的な環境適応の内容が、遊牧や牧畜だった場合。
その社会は、移動社会となる。
（Ｃ－１－２）
原初的な環境適応の内容が、農耕だった場合。
その社会は、定住社会となる。

（Ｃ－２）
原初的な環境適応のための、基盤的な行動様式。
基本的食糧の獲得のための行動様式。
それらを、根本的に変えること。遊牧や牧畜を捨てて、農耕を開始す

ること。
例。
欧米諸国。
地球温暖化防止への対策。
家畜の飼育を止めること。
家畜の飼料だった植物を、飼育者自身が直接食べるようにすること。

そのことが引き起こす、毎日の日課における、移動生活様式から、定住生活様式への変化。
社会の仕組みの、移動社会から定住社会への変化。

（2021年1月初出。）

移動生活様式。

移動生活様式中心社会。人々の形成する心理構造。

移動生活様式中心社会。
それは、人々が、以下を、強制される社会のことである。
移動生活様式。

人々を取り巻く、自然環境。
人々を取り巻く、生活環境。

それは、そうした強制を、人々に対して、行う。

人々は、移動中に、ある位置で、一時的にとどまる。
人々は、その位置で、生活作業を、し続ける。
それは、生存上、必要である。

人々は、その所在の位置を、次の新天地へと、絶えず進める。

人々は、それを、一定の短い期間以内に、行う。

その生活作業の、一つの定まった地点での持続。
それは、人々の生存において、無効化される。
人々は、その期間が完了すると、それを、迎えてしまう。

移動生活様式中心社会。
それは、以下の人々の社会である。
遊牧民。
牧畜民。
例えば、モンゴルの草原。
こうした社会での生活。
それは、以下の存在に大きく依存している。
家畜。

人々は、その生活において、以下の行為を実行する。
家畜の放牧。

人々は、ある位置で一時的にとどまる。
人々は、家畜に対して、牧草を、食べさせる。
人々は、以下の（１）の位置を、以下の（３）の位置へと、進める。
人々は、それを、以下の（２）の期間内に、進める。
人々は、それを、以下の（４）のタイミングで、進める。
（１）
その所在の位置。
（２）
以下の一定の短い期間以内。
（２－１）
家畜が、牧草を、食べ尽くすまで。
（３）
次の新天地。
（４）
絶えず。

１．生活上の移動の強制。その発生。

生活上の移動の强制。
その発生。

////
移動生活様式社会。
それを生み出す自然環境。
それを生み出す生活環境。
そこでは、人々は、以下のことを、許されない。
定住。
それを、ある一か所で行うこと。
それを、一定の短い期間以上、行うこと。

それは、生存条件的に、許されない。

仮に、人々は、そのまま定住していた、とする。
すると、人々は、必然的に、生きていけなくなる。
人々は、死んでしまう。
例えば、遊牧民。
仮に、人々が、以下の（1）において、以下の（3）を行った、とする。
仮に、それは、以下の（2）に対してだった、とする。
（1）
家畜の放牧。
（2）
家畜。
（3）
人々は、それを、一つの定まった場所に、とどめておく。

すると、上記の（2）は、以下の（4）の期間内に、以下の（5）を、引き起こす。
その結果、以下の（6）の状況が、発生する。
（4）
一定以下の期間内。
（5）
その場所の牧草。
家畜は、それを、全部食べてしまう。
（6）
食べる牧草。
それが、無くなること。

それが、不足すること。
それが、欠乏すること。

仮に、以下の（１）が、以下の（２）に対して、以下の（３）を考えた、とする。
仮に、それは、以下の（２）に対してだった、とする。

（１）
牧者。
（２）
その場所のこと。
（３）
それは、条件が良さそうである。
それは、個人的に気に入っている。

仮に、上記の（１）は、上記の（２）について、以下の（３）を実行した、とする。

（３）
そこに、そのままとどまること。

すると、以下の（４）は、以下の（５）の状態になる。
その結果、以下の（４）は、以下の（６）の状態になる。
その結果、上記の（１）は、以下の（７）の状態になる。

（４）
家畜。
（５）
それは、食べるものがなくなる。
（６）
それは、飢えて死んでしまう。
（７）
それは、生活できなくなる。
それは、死んでしまう。

上記の（１）は、以下の（９）を実行する。
それは、以下の（８）の目的のためである。
（８）
どうしても、生きていくこと。

（９）
次の新天地を、求めること。
そのために、移動すること。

２．新天地。それへの絶え間ない移動。その强制。

新天地。
それへの絶え間ない移動。
その强制。

////
移動生活様式中心社会。
その社会規範。

それは、以下の（１）の実現のために、以下の（２）が必須である。

（１）
人々が、そこで生きていくこと。
（２）
新天地。
それへの絶えざる移動。
その生活。

それは、以下の（３）を、以下の（５）とする。
それは、以下の（４）の理由である。
（３）
一か所。
それへの定住。
（４）
人々の生存のため。

（５）
それは、一時的にしか許されない。

それは、人々に対して、以下の（６）を実行する。
（６）
ストレス。
それは、根本的に強い。
それを、与えること。

人々の生活。
それは、以下の内容である。
新天地。
それへの移動。

新天地。
そこでの新たな環境適応。

それらの実現。
それが絶えず求められる生活。

人々は、生きていくために、以下の内容を考える。
私たちの生活は、これからどうなるか、分からない。
それは、何が起きるか、分からない。
だけど、それは、まあ何とかなるだろう。

人々の考え方。
それは、どうしても楽天的になる。
移動生活様式中心社会。
その人々。
その楽天的な考え方。
それは、実は、以下の内容である。
人々は、その生存上、その生成を、環境から強制された。
新天地。
それへの移動。
人々は、上記の行為を、好きでやっているのではない。
それは、以下の内容である。
自然環境。
生活環境。
それらによる、人々への強制。

人々にとって、以下の（１）の行為以外には、以下の（２）の内容は存在しない。
（１）
新天地に移動すること。
（２）
生存上の選択の余地。

例。
アメリカ。

従業員。
彼は、一つの企業に定住しない。
彼は、企業間を、頻繁に移動する。
彼は、そうした転職を、絶えず試みる。
その原因。
それは、以下である。
一か所への定住。
それが許されないこと。
新天地。
それへの絶えざる移動。
それを、強制されること。

そうした心理構造。
その内蔵。

新天地に移動すること。
転職すること。
人々は、それらを、自分の好みで行っている訳ではない。

移動生活様式の文化。
それがもたらす強迫観念。
人々は、それを、心理的に内面化している。

新天地。
それへの転職による移動。
人々は、それを、心理的に絶えず強いられている。

以下の（１）は、以下の（２）を、許さない。
以下の（１）は、それを、以下の（３）に対して、許さない。

以下の（１）は、それを、以下の（４）において、許さない。
そのことは、以下の（３）に対して、以下の（５）の行為を強制する。
（１）
自然環境。
生活環境。

（２）
一か所。
それへの一定以上の定住。

（３）
そこで暮らす人々。

（４）
人々の生活上。

（５）
チャレンジ。

上記の（５）。
それは、以下である。

人々は、絶えず、次の新天地に進む。

人々は、そうして、何とか生きていく。

人々は、そのために、上記の（５）の行為を、やむを得ず、やっている。

人々が、そうした行動を、取ること。

それは、以下に起因する。
移動生活様式中心の価値観。

現在の居場所。
人々は、そこから、心理的に追い立てられている。

３．先進的な成果。独創的な成果。その强制的な発生。

移動生活様式。
それは、以下を、もたらす。
先進的な成果。
独創的な成果。
その强制的な発生。

////
移動生活様式中心社会。
そこでは、人々は、以下を强制される。
未知との遭遇。
人々は、それを、移動中に、强制される。
人々は、それを、絶えず强制される。

人々は、移動中に、次の進出先で、以下に出くわす。
新たな状況。
それへのチャレンジ。
人々は、それを、絶えず强制される。

人々は、以下の（１）において、以下の（２）の行為を、强制される。
（１）
その人生。

（２）
新天地。
人々は、そこに、新たに進出する。
人々は、その土地で、まだ何も無いところから、以下を行う。
人々は、試行錯誤を、繰り返す。
人々は、いっぱい失敗する。
人々は、次の試行錯誤に備える。
人々は、そうして、たまに、以下の（３）を得る。

（３）

成功。
その成果。
その内容は、先進的になる。
その内容は、独創的になる。
それは、もれなく、そうなる。

それは、以下には当たらない。
人々が自主的に望んだこと。

移動生活様式中心社会。
例えば、欧米。

人々は、科学研究などで、以下の成果を出す。
それは、先進的である。
それは、独創的である。
人々は、それらを、たくさん出す。
先進的な独創研究。
人々は、それを、好きで行っているわけでは、全然ない。

人々は、生活上、以下の状況に置かれている。
何も無い状態での試行錯誤。
それを、絶えず强制されること。
そうした强迫的な心理状況。

先進的、独創的な成果。
その生成。
人々は、それを、無意識のうちに、心理的に强制されている。
こうした先進的、独創的な成果。
それらが生み出される理由。
それは、以下の理由ではない。
自由な研究。
先進的研究。
独創的研究。
それらへの許可の存在。
人々が、それらを、個人的な好みでやっていること。

それは、以下の理由である。

人々は、移動生活様式を行う。
未知の新天地。
人々は、生活上、そこへと、強制的に絶えず出向かされる。

人々は、そこにおいて、以下の内容を、何とかして実現しないといけない。
その環境へと、新たに適応すること。
そのために必要な、新たな行動様式や文化。
それらを、いち早く生成すること。

人々は、そうでないと、生きていけない、人々は、そうした強迫的な観念を持つ。

人々は、以下の（１）に基づいて、以下の（２）を実行している。
（１）
上記の、強迫的な観念。
（２）
先進的な成果。
独創的な成果。
それらを、生み出すこと。

人々によって、そうした成果が生み出される状況。
それは、以下の状況である。
人々は、精神的に切羽詰まる。
人々は、精神的に追い詰められる。
それは、かなりの程度である。
人々は、生存し続ける上で、それを、必ず体験する。

そうした状況は、以下の面で、あまり褒められた内容ではない。
人々の生きやすさ。

４．個人主義・自由主義・それらの発生。

移動生活様式。
それは、以下の考えを発生させる。

個人主義。
自由主義。

////
放牧などの移動生活様式。
それは、人数面で、以下の場合が多い。
人々は、それを、一人で行う。
人々は、それを、少数で行う。

生活中に助けてくれる他者の存在。
それは、基本的に稀薄である。
人々は、何もかも、自分で何とかしなければならない。
そのため、人々には、以下の実現が必須である。
生活する個人。
その精神面での自立。
その精神面での独立。

人々は、生活上、以下を必要とする。
人々は、以下の（１）について、以下の（２）を実行する。
（１）
次の移動先。
（２）
人々は、それを、自身の個人の判断で決める。
人々は、それを、孤独に決める。

移動生活様式。
それは、以下が中心である。
個人行動。

そこには、以下の内容が存在する。
個人の意思決定。
その自由。
それは、生活上のものである。

その点で、以下の（１）は、以下の（３）を、生成する。
以下の（１）は、それを、以下の（２）において、生成する。
以下の（１）は、それを、以下の（４）の状態で、生成する。
（１）
移動生活様式。

（２）
その社会の人々の心の中。
（３）
個人主義。
自由主義。
（４）
それは、程度の面で、強烈である。

個人行動。
自由行動。
人々は、それらを、自分の好き勝手で行っているのではない。

人々は、生活上、それを、絶えず強制されている。
人々にとって、それは、無意識のうちに、習い性になっている。

５．天の神。それを信仰する宗教。その発生。その権威主義的性質。

移動生活様式がもたらす、以下の発生。
天の神。
それを信仰する宗教。
その権威主義的性質。

////
人々は、移動生活様式中に、以下を行う必要がある。
自身の次の移動先。
それを、決めること。
それを、個人の判断で決めること。
それを孤独に決めること。

人々は、移動中は、以下を、ひたすら強いられる。
個人行動。
人々は、移動中は、心理的に、とにかく心細い。

その精神状態。

それは、人々の生活の中で、絶えず連続する。
人々は、以下を自覚する。
私は、ひとりぼっちである。
私は、弱い存在である。

そこで、人々は、移動生活様式中、以下の存在を、求める。
大きな絶対者。

人々は、それを、強烈に求める。
人々は、その絶対者に、以下を求める。
絶対者は、彼らを、見守る。
絶対者は、彼らを加護する。
絶対者は、彼らと対話する。
絶対者は、彼らを助ける。
人々は、それらを、絶えず求める。

絶対者。
それは、以下の内容で良い。
仮想の存在。
人為的な作り物。

それは、以下の（１）における、以下の（２）の実現につながる。
（１）
移動生活様式中心社会。

（２）
宗教的な神。
その存在。
その誕生。
その心理的肯定。

絶対者。
人々は、それに対して、以下を感じる。
大きな権威。
大きな威光。

人々は、それに対して、心理的に依存する。

人々は、それに対して、寄りすがる。

人々は、以下の（１）に対して、以下の（２）を実行する。
（１）
絶対者。
そうした権威ある存在。
（２）
人々は、心理的に、全面的に従う。

人々は、以下の存在になる。
権威主義者。

人々は、以下の（１）について、以下の（３）の内容を考える。
人々は、それを、以下の（２）の状況下で、考える。
（１）
絶対者。
（２）
移動生活様式中。
（３）
それは、以下の場所に存在する。
天空。
それは、自分の視界に絶えず映り続ける。

人々は、以下の（１）に対して、以下の（２）の内容を考える。
（１）
絶対者。
それは、以下の（２）に対して、以下の（３）を実現することが可能である。
（２）
地上を移動中の、個々の人々。
その存在。
（３）
絶対者は、彼らを、絶えず見守る。
絶対者は、彼らを、絶えず加護する。

それは、以下の場合のみ、可能である。
絶対者が、位置的に、天空に存在している時。

人々は、以下の（１）に対して、以下の（２）の実現を、望む。

（１）
絶対者。
（２）
彼ら自身との対話。
それが、一対一であること。
それが、直接であること。
そのことが、絶えず可能であること。

彼らは、地上を移動中である。
彼らは、孤独である。

人々は、以下の（１）を、以下の（２）として、求める。
（１）
絶対者と彼らとの間。
それらを、媒介する存在。
それを取りなしてくれる存在。
それに当たる地上の人間。

（２）
宗教指導者。
彼は、以下の存在になる。
以下の（２－１）の存在の、地上における代行者。
（２－１）天空の権威者。
人々を、精神的に指導する者。
人々を、精神的に支配する者。
人々にとっての、上位者。

以下の（１）の状況では、以下の（３）が発生する。
それは、以下の（２）において、発生する。
（１）
移動生活様式上。
（２）
人々の心の中。
（３）
絶対者としての天の神。
それへの依存心。
それは、必然的である。
それは、以下に基づく。

人々が持つ自覚。
自らの心の内面。
それが持つ、人間存在としての、根本的な弱さ。
人々は、それを、無意識のうちに、痛感し続ける、
それは、以下の理由である。
人々は、以下の（１）の状況では、以下の（２）を強制される。
（１）
移動生活様式中。
（２）
個人行動。
それは、孤独である。
人々は、それを、絶えず強制される。

自身が持つ、そうした心理的な脆弱さ。
人々は、それを、外部世界へと反映する。
そして、人々は、以下を生み出す。
絶対者。
絶対者は、以下の内容を、サポートする。
人々の心理的弱さ。

人々は、以下の（１）の状況では、以下の（３）を実行する。
人々は、それを、以下の（２）に対して、実行する。
（１）
移動生活様式中。
（２）
その自分たちが開発した絶対的存在。
（３）
心理的にすがり続けること。

移動生活様式の人々。
彼らにとって、以下は、どうしても受け入れられない存在である。
無神論。

仮に、人々が、それを信じた、とする。
すると、人々は、以下を失う。
精神的な支え。
それは、移動生活様式中に、人々が生きていく上で、必須である。

その結果、人々は、移動生活様式中、以下の（１）について、以下の（２）を経験する。
（１）
自身の心理的な孤独さ。
自身の心理的な脆弱さ。

（２）
それらに、絶えず悩まされ続けること。

人々は、上記を解決するために、以下の存在が必須である。
神。

移動生活様式中心社会。

絶対者。
それを、信じる宗教。
それらは、人々の心の中で、無条件で存続し続ける。
それらは、以下とは無関係に、存続し続ける。
その内容。
その科学的な正しさの欠如。

人々にとって、以下の二つは、生活上、排他的に両立する。
（１）
実証的で科学的な知見。
その信仰。
（２）
宗教の信仰。

６．議会制民主主義の発生。

移動生活様式がもたらす議会制民主主義の発生。

////
移動生活様式。
そこでは、人々が集まってくる。

人々は、様々なところから、集まってくる。
そこでは、いろいろな人々が、集まってくる。

人々の集合体。
それが、そこでは、一時的に、形成される。
そこでの人々の集合的な意思決定。
その手段。
その一つとして編み出された考え方。
それは、以下である。
議会制民主主義。

それは、開放的である。
人々は、議場を、設定する。
人々は、その場所で、即席の議論を、戦わせる。
人々は、以下を行う。
賛成の意見。
反対の意見。
それらの明快な表出。

意思決定に向けての真剣な討論。

人々は、以下の（１）を、以下の（２）の手段で、決定する。
（１）
自分たちの最終的な意思。
（２）
出席者による多数決の投票。

議会制民主主義。
その思想は、移動生活様式に特有である。

（初出2020年5月）

定住生活様式。

定住生活様式中心社会。人々の形成する心理構造。

定住生活様式中心社会。
それは、具体的には、以下の内容が必須となる社会である。

（１）
以下の条件下で生きること。
植物栽培向けの自然環境。

（２）
以下を所有すること。
自家の農地。

（３）
以下の（３－１）の場所で、以下の（３－３）の行為を実行すること。
それを、以下の（３－２）の期間、実行すること。
（３－１）
一か所の土地。
（３－２）
長期間。
連続的。
（３－３）
定住すること。

定住生活様式中心社会。
それは、以下の人々の社会である。

人々は、植物栽培主体で暮らす。
稲作。
畑作。
土地への定住。
人々は、それを、一方的に強制される。
人々は、農耕民として生きる。
自然環境は、人々に対して、その生き方しか許さない。

定住生活様式中心社会。

定住生活様式者たち。
人々は、以下のように生きることを、全面的に強いられる。
それは、自然環境の影響による。

１．生活上の定住の強制。その発生。

////
人々は、以下の中で生きる。
生きていくために、定住生活様式のみが可能な、自然環境。
そうした自然環境。

例。
日本の本州。
それは、モンスーン気候である。
それは、稲作が必須である。

放牧。
それにとって必要な、柔らかい牧草。
それが、ほとんど生息しない。
そうした場所。

放牧。
遊牧。
牧畜。
生きていく上で、それらが不可能な環境。
人々は、そうした環境で生きる。

粗放な空間分布。
空間移動。
定期的な移住。
それらが実現しにくい環境。

移動生活様式に不向きの環境。
人々は、そうした環境で生きる。

２．居宅。その群れ。それらの形成。その強制。

////
人々は、以下を、形成する。
居宅。
その群れ。

それは、一か所に定住する。
それは、集約的である。
それは、密集的である。

人々は、その土地に、永続的に居住し続ける。

人々は、その場所で、以下を、実行し続ける。
植物栽培。
稲作。
畑作。

人々は、そうした形で生きることを、強制される。

３．仲良し定住集団の形成。その連続的な維持。その強制。

////
人々は、以下を強制される。
以下の状況の発生。
その回避。

人々は、周囲の他者と意見が違う状態になる。
人々は、周囲の他者と喧嘩して不仲になる。

人々は、そうした周囲の他者と、毎日、一緒に生きる。
人々は、そうした周囲の他者と、子孫末代まで、永続的に、一緒に生きる。

人々にとって、それらは、自分たちが生きていく上で、致命的にまずい。

それは、以下の理由である。
農地は、以下が不可能である。
それを、他へと、移動させること。
それを、他へと、引っ越しさせること。

そこで、人々は、以下のために、全面的に配慮する。
人々は、以下の（１）の人々との間で、以下の（２）の状態を実現する。
（１）
周囲の他者。

（２）
心理的な和合。
心理的な同調。
心理的な一体化。
それらの連続的な維持。

その結果、人々は、以下の行為を、強制される。
人々は、そのために、必死になる。
人々は、以下を実現する。
人々は、以下の（１）を、以下の（２）にする。
（１）
自分たちの居宅の群れ。

（２）
仲良し定住集団。
それを、永続させること。

人々は、以下の行為を、強制される。
人々は、以下の（１）において、以下の（２）を実現する。

（１）
仲良し定住集団。

（２）
互いの意見。
それを、割らないこと。
意見面での満場一致。

それは、人々の間に、以下の傾向を生み出す。

対人関係面での協調性。
対人関係の維持。
対人関係の継続。

対人関係そのものの重要性。

人々は、それらを、生きていくために、全面的に重視する。

人々にとって、以下の実現が必須となる。
例。
稲作。
水利。

別々の定住者の間で、以下を実行すること。
利害調整。
同意、意見の一体化。
意見の一本化。

４．同調。一体化。同期。それらの強制。

////
人々は、以下の（１）において、以下の（３）を実行する。
人々は、それを、以下の（２）のために、実行する。
（１）
仲良し定住集団。

（２）
栽培植物。
その植え付け。
その刈り取り。

（３）
共同作業。
それは、一斉に同期する。
それは、繁忙である。

その作業の実現のため、以下の実現が必須である。
人々は、以下の（１）との間で、以下の（３）の状態になる。
それは、以下の（２）について、以下の（３）の状態になる。
（１）
周囲の他者。
仲良し定住集団。
そのメンバー。
（２）
時間的な側面。

（３）
同調すること。
一体化すること。

植物栽培。
その周期は、一年で一周する。
以下の（１）の間で、以下の（２）が発生する。
（１）
同じ植物の栽培者。

（２）
栽培作業の一斉同期。

そうした植物栽培上のルール。
人々は、それに、束縛されている。

そうした束縛。
それは、強い。

それは、永続的である。

５．前例、しきたり。それらの絶対視。祖先崇拝。

////
人々には、以下の実現が必須である。
人々は、以下の（１）の地点で、以下の（３）を実行する。
人々は、それを、以下の（２）の期間、実行する。
（１）
ずっと同じ場所。
（２）
先祖代々。
永続的。
（３）
住み続けること。

人々の生活において。
以下の（１）に関して、以下の（２）が発生すること。
その頻度は、非常に低い。
（１）
居住空間。
周囲生活空間。
（２）
移動。
変動。
周囲環境の変動。

その変動の無い状態。
それは、長期間、続く。
それは、永続的である。

人々は、以下を要求される。
以下の環境下で、生き続けること。
そこでは、以下の（１）が、以下の（２）になる。
（１）

前例、しきたり。
（２）
それは、有効である。
それは、絶対不可侵である。
それは、永続する。

そのため、人々の間には、以下の（２）が生まれる。
それは、以下の（１）の内容である。
（１）
祖先崇拝。
（２）
宗教。
社会的教え。

人々は、以下の（１）について、以下の（２）を実行する。
（１）
自分たちの先祖。
自分たちの先人。
彼らの存在。

（２）
敬うこと。
信仰すること。
それらの対象とすること。

そうした信仰の理由。
それは、以下である。
上記の（１）の人々は、以下の（４）の行為を実行した。
上記の（１）の人々は、それを、以下の（３）の内容について、実行した。
（３）
前例。
しきたり。

（４）
それを、生み出すこと。
それを、維持し続けること。

上記の（３）。

それは、人々が、以下を実現するために、必須である。
人々が、以下の（１）において、以下の（２）を実現する。
（１）
自分たちの土地。
（２）
その場所で、生活し続けること。

６．移動。新分野への進出。それらの回避。

////
人々は、以下の（１）を実現すると、以下の（２）の実現が不要になる。
（１）
一回、定住すること。
（２）
以下の空間。
以下の領域。
それは、新しい。
それは、未知である。

そこへと、動くこと。
そのために、チャレンジすること。

人々の生活において、上記は、ほとんど必要ない。
仮に、人々が、動いた、とする。
人々は、以下の（１）によって、以下の（３）の行為を受ける。
人々は、それを、以下の（２）として、受ける。
（１）
他の定住者。
他の仲良し定住集団。

（２）
上記の（１）の所有する土地。
彼は、そこへと、勝手に侵入した。

（３）
怒られること。
叱られること。

そのため、人々は、上記の行為を避ける。
人々は、代わりに、以下の行為を行う。
動かない生活。
新分野へと進出しない生活。
それらの持続。

７．閉鎖性。排他性。部外者への不信。

////
人々は、時間の経過に伴って、以下の傾向を強める。
（１）
人々は、以下の他者しか、信用しない。
仲良し定住集団。
そのメンバー。
その集まり。
彼らは、以下の（１）の期間、以下の（２）を実行してきた。
（１）
今までずっと。
（２）
その場所に、定住すること。
同じ場所に、定住すること。
互いに、仲良くすること。
互いに、一体化すること。
一緒に暮らすこと。

（２）
人々は、以下の他者に対して、不信感を強く持つ。
よそ者。
流民。

（３）

人々は、以下の価値観を、強く持つ。
以下の社会的価値観。
人々は、閉鎖的である。
人々は、排他的である。

人々は、それらの傾向を、持続する。

人々は、互いに、それを、強いられる。
周囲の他者は、人々から、それを、強いられる。

８．定住集団からの追放。その徹底的な回避。

////
仮に、人々が、以下の（１）の場所から、追い出された、とする。
（１）
定住地。

すると、人々は、以下の（２）の状態になる。
（２）
流民。

定住生活様式。
その定住集団は、排他的である。

それらの定住集団は、どこも、上記の（２）を、受け入れない。

その結果、上記の（２）は、以下の（３）の状態になる。
（３）
彼は、まともに生きていけなくなる。

そのため、人々は、必死になって、以下の存在に、しがみつこうとする。
今の定住地。
今の仲良し定住集団。

９．古参者の、新参者に対する、絶対的な優位性。

////
人々の間では、以下の状況が、発生する。

（１）
その土地。
その土地の、仲良し定住集団。

（２）
前例。
しきたり。
伝統。

（３－１）
以下の人物。
その人物は、上記の（２）を、たくさん習得している。

その人物は、優位になる。
その人物は、上位者として扱われる。

例。
古参者。
教師。
師匠。

（３－２）
次の立場の人物。
その人物は、上記の（２）を、少ししか習得していない。

その人物は、劣位になる。
その人物は、下位者として扱われる。
その人物は、以下の行為を強制される。
その人物は、以下の（１）の内容について、以下の（２）を実行する。
（１）
上記の（３－１）の人物。
その意見。

（2）
隷従。

例。
新参者。
生徒。
弟子。

（4）
それは、恒常化する。

言論の自由。
それは、人々の間には、存在しない。
それは、根本的に、存在しない。

前例。
しきたり。
その内容。
それに対して、疑問を持つこと。
それを、批判すること。
それを、行う自由。
それらは、根本的に存在しない。

前例。
しきたり。
その内容。
人々は、それに対して、以下を强制される。

人々は、それを、暗記する。
人々は、それを、理解する。
人々は、それを、習得する。
人々は、それを、体得する。
人々は、それを、丸呑みする。

人々は、それらを、盲目的に、行う。

それは、人々が、生きていくために、必須である。

それは、人々にとって、以下の実現のために、必須である。
彼ら自身も上位者扱いされる。
彼ら自身も偉くなる。

仮に、人々が、以下の（１）について、以下の（２）を実行した、とする。
（１）
ある土地。
その仲良し定住集団。

（２）
その新たなメンバーとなる。
そこに新規加入する。

あるいは。
仮に、人々が、以下の（１）について、以下の（２）を実行した、とする。
（１）
既存の仲良し定住集団。
その存在する土地。

（２）
彼らは、そこに引っ越しをする。

その場合、以下の（３）の事態が、発生する。
（３）
以下の（４）。
人々は、それを行った。
その対象。以下の（１－１）。
人々は、それを、以下の（２－１）として、行った。

（１－１）
既存の、定住済の古参者。
その定住集団。
その中。

（２－１）

新参者。

（4）
新規に加入すること。

古参者。
彼らは、以下を掌握している。
その土地。
その仲良し定住集団。
その前例。
そのしきたり。

彼らは、以下の存在である。
絶対的な権力者。

人々は、以下の（2）を強制される。
人々は、それを、以下の（1）について、強制される。
（1）
以下の人間関係。
古参者は、新参者よりも、上位に立つ。
（2）
それを、受け入れること。
それに一方的に忍従すること。

人々の間で、以下の（1）は、以下の（2）の場合のみ、発生する。
（1）
人間関係。
それが平等になること。

（2）
全く新たな土地。
全く新たな居住地。
そこに、一斉に加入した人々の間。
そこに、同時に加入した人々の間。
それらの人々の間のみ。

１０．生産設備の所有者の、絶対的な優位性。その永続化。

////
人々の間では、以下の状況が発生する。

（１）
その土地。
その仲良し定住集団。
その生産設備。

（２－１）
その資本所有者。

その人物は、優位になる。
その人物は、上位者として扱われる。

例。
地主。

（２－２）
自分では資本を所有しない者。
借用者
その人物は、劣位になる。
その人物は、下位者として扱われる。
その人物は、以下を强制される。

上記の（２－１）の人物。
その意見。
それに取り入ること。
それに隷従すること。

例。
小作人。

（３）
そうした上下関係。
それは、永続化する。

１１．役職保持者の、絶対的な優位性。役職の世襲化。

////
人々の間では、以下の状況が発生する。

（１）
その土地。
その仲良し定住集団。
その役職。

（２－１）
有職者。
役職保持者。

その人物は、優位になる。
その人物は、上位者として扱われる。

例。
上役。
上司。

（２－２）
無職者。
下っ端。

その人物は、劣位になる。
その人物は、下位者として扱われる。
その人物は、以下を强制される。

上記の（２－１）の人物。
その意見。
それに取り入ること。
それに隷従すること。

例。
部下。

（３）
そうした上下関係。
それは、永続化する。

例。
人々の間では、以下が発生する。
役職保持者。
その世襲。

１２．上下関係の永続化。社会的昇進の条件。

////
仲良し定住集団。
その内部。
以下の（１）による、以下の（２）の実現。
（１）
集団メンバー。
（２）
上位の役職。
それへの昇進。

それは、以下の要因によって決まる。

（１２－１）
メンバー自身が、年を重ねる。
そうして、以下の（１）において、以下の（２）が向上する。
（１）
メンバー自身。
（２）
前例。
しきたり。
その習得度合い。

（１２－２－１）
以下の（１）は、以下の（３）を実現する。
以下の（１）は、それを、以下の（２）に対して、実現する。

その結果。
以下の（２）は、以下の（４）を実行する。
以下の（２）は、それを、以下の（１）に対して、実行する。
その結果。
以下の（２）は、以下の（５）を実行する。
以下の（２）は、それを、以下の（１）に対して、実行する。
その結果。
以下の（１）は、以下の（６）を実現する。

（１）
メンバー自身。

（２）
上位者。

（３）
上記の（２）の人物。
その人物にとって、気に入る成果。
それを、上げること。

（４）
上記の（２）の人物は、上記の（１）の人物を、メンタル面で気に入る。

（５）
上記の（２）の人物は、上記の（１）の人物を、より上の役職に引き上げる。

（６）
上位の役職。
それへの昇進。

（１２－２－２）
以下の（１）は、以下の（３）を実現する。
以下の（１）は、それを、以下の（２）に対して、実現する。

その結果。
以下の（２）は、以下の（４）を実行する。
以下の（２）は、それを、以下の（１）に対して、実行する。
その結果。
以下の（２）は、以下の（５）を実行する。
以下の（２）は、それを、以下の（１）に対して、実行する。
その結果。
以下の（１）は、以下の（６）を実現する。

（１）
メンバー自身。

（２）
上位者。

（３）
上記の（２）の人物。
上記の（１）の人物は、その人物に対して、忖度する。
上記の（１）の人物は、その人物に対して、懐く。
上記の（１）の人物は、その人物に対して、取り入る。

（４）
上記の（２）の人物は、上記の（１）の人物を、メンタル面で気に入る。

（５）
上記の（２）の人物は、上記の（１）の人物を、より上の役職に引き上げる。

（６）
上位の役職。
それへの昇進。

（初出2020年5月）

定住生活様式中心社会。それにおける教育。

定住生活様式中心社会。
それにおける教育。
それは、以下の（A）について、以下の（B）を実行することである。

（A）

（１）
前例。
しきたり。
それに従って生きること。

（２）
人々は、周囲の他者との間で、以下を実現する。
心理的な同調。
心理的な一体化。

人々は、それらを、恒常的に実現する。

（３）
人々は、上位者に取り入る。
（３－１）
人々は、上位者に対して、心理的に密着する。
（３－１－１）
人々は、上位者に対して、忖度する。
（３－１－２）
人々は、上位者に対して、心理的に懐く。

（３－２）
上位者が気に入る成果。
人々は、それらを、とにかく出し続ける。

（B）
それらを、理解すること。
それらを、体得すること。

人々は、以下の（C）を、以下の（D）によって、実行する。

（C）
こうした教育。

（D）
以下の社会関係。
その総動員。

（1）
母子。
（2）
師弟。
（3）
先輩。
後輩。
（4）
古参者。
新参者。
（5）
上位者。
下位者。
（6）
土地等の生産設備。
その資本所有者。
その借用者。
////
例。
地主。
小作人。
////
例。
社主。
社員。

上記の（1）。
母子関係。

それは、以下である。
上記の全ての社会関係。
その基盤。

（初出2020年5月）

定住集団。定住ネットワーク。定住生活様式中心社会。その分類。

定住生活様式中心社会では、人々の定住社会関係は、以下に分類される。

（１）社会関係の開閉の度合い。その度合いが、以下の内容である場合。
（１－１）定住集団。その社会関係。それは、閉じている。その領域は、限定される。
（１－２）定住ネットワーク。その社会関係。それは、開いている。その領域は、限定されない。

（２）血縁関係。その関係が、以下の内容である場合。
（２－１）単系。父系。母系。その社会関係は、以下のどちらか一方に閉じる。父方。母方。
（２－２）双系。その社会関係は、以下の両方に、同時に広がる。父方。母方。

（３）血縁関係と非血縁関係との関連の度合い。その度合いが、以下の内容である場合。
（３－１）先天的。血縁関係のみを、重視する場合。
（３－２）後天的。非血縁関係を、血縁関係並みに、重視する場合。

例。
中国社会。韓国社会。北朝鮮社会。北部ベトナム社会。
それは、先天的定住集団の社会の一種である。

それは、（１－１）と（２－１）と（３－１）の組み合わせである。
それは、父系の社会である。それは、父系の血縁集団の寄せ集めであり、それぞれ、外部に対して、閉じている。
その社会では、血縁集団のメンバー同士は、内部者扱いで、信頼できる相手である。
その社会では、非血縁関係の者同士は、部外者扱いで、不信の相手である。
その社会では、各々の血縁集団は、とても巨大である。
その社会では、各々の血縁集団は、どれも例外無く、千年以上にわたる族譜を所持していることが多い。

例。
ロシア社会。
それは、先天的定住集団の社会の一種である。
それは、（１－１）と（２－１）と（３－１）の組み合わせである。
彼らの食糧生産の様式は、基本的に、麦や野菜の栽培や、漁獲や狩猟が主であり、遊牧や牧畜は、あまり行わない。彼らは、定住生活様式者である。
以前のミールのような定住集団が、彼らの農村において主流である。
彼らの社会一般が、集団主義である。

ロシアの血縁関係。
それは、夫婦別姓である。
それは、後天的な、姓の変更を、起こさない。
それは、先天的定住集団である。

異なる先天的定住集団。それらのメンバー間における、関係。
それらは、短期的で、一時的である。
それらは、相互不信に、満ちている。
それらは、外部から强制されない限り、一つには、まとまらない。
それらは、その点で、個人主義的である。

ロシアの血縁関係。
父母は、以下の内容を、実現可能である。
彼らの子供の姓を、彼らの両方の姓から、一方の任意の姓を、自由に選択して、付加すること。
その結果。
彼らの血縁関係は、そうした面では、単系で、自由系である。

父母は、彼らの子供の名前の末尾に、母親の名前ではなく、父親の名前を、自動的に付加する。
そのことは、新たに生まれてくる子供の父親が、誰であるかを、社会的に特定可能にする。
その結果。
彼らの血縁関係は、父系の側へと、一世代ずつ、接ぎ木の要領で、伸びていく。
彼らの血縁関係は、そうした面では、父系である。

彼らの社会は、先天的定住集団の社会の一種である。
彼らの企業では、短期雇用が主流である。
彼らの企業では、雇用者たちは、個性の埋没しない集団主義で動く。
彼らの企業では、雇用者たちは、各自がバラバラに作業をして、最後にやっつけ仕事で、彼ら自身の成果を統合する。
彼らの社会風土も、彼らの企業風土も、女性優位である。彼らは、情緒で動く。

例。
日本社会。
それは、後天的定住集団の社会の一種である。
それは、（１－１）と（２－１）と（３－２）の組み合わせである。
それは、父系の社会である。それは、父系の血縁集団の寄せ集めであり、それぞれ、外部に対して、閉じている。
その社会では、血縁関係のメンバー同士は、部内者扱いで、信頼できる相手である。
その社会では、非血縁関係のメンバー同士において、各々が、後天的に生成された、同一定住集団に所属することが出来る。
同一の後天的な定住集団に所属しているメンバー同士は、部内者扱いで、信頼できる相手である。
その社会では、各々の血縁集団は、あまり大きくない。
その社会では、各々の血縁集団は、最上位の血縁集団を除き、数千年にわたる族譜を所持することは、あまり無い。
その社会では、非血縁集団のメンバー同士の方が、血縁集団のメンバー同士よりも、親しく信用できることが、多発する。

例。
東南アジアのタイ社会。南部ベトナム社会。

それは、先天的定住ネットワークの社会の一種である。
それは、（１－２）と（２－２）と（３－１）の組み合わせである。
その社会の血縁家族関係は、双系である。その社会関係は、以下の両方に、同時に広がる。父方。母方。
その社会では、血縁関係のメンバー同士は、コネクション保持者扱いで、信頼できる相手である。

（2021年9月初出）

定住生活様式中心社会における定住民と流民の分類

定住生活様式中心社会では、人々は、定住民と流民に分類される。
（１）分類の基準
（１－１）定住性、固定性の高い、流動性の低い人々は、定住民扱いになる。
（１－２）定住性、固定性が低い、流動性が高い人々は、流民扱いになる。
（２）上下関係
（２－１）定住民は、社会的に上位である。
（２－２）流民は、社会的に下位である。
（３）「仲良し定住集団」との関係
（３－１）定住民は、どこかの仲良し定住集団に加入、所属して、定住できている。
（３－２）流民は、どこの仲良し定住集団にも入れてもらえず、住居を転々とする。
（４）生活レベル
（４－１）定住民は、一定以上の水準の豊かな生活、安定した生活を保証される。
（４－２）流民は、下級の労働力供給者として奴隷扱い、使い捨て扱いされる。
（５）地位の変動
（５－１）定住民は、「仲良し定住集団」を追い出されると、流民になる。
（５－２）人々は、いったん流民の立場になると、定住民の立場に

は、なかなか戻れない。

（初出2020年5月）

定住生活様式と、研究の自由

定住生活様式では、流民にならないと、自由な研究ができない。
定住生活様式では、定住集団に入っている限り、集団内部での相互同調、一体化、忖度が優先される。そのため、定住生活様式では、定住民による自由な研究は不可能である。
定住生活様式では、流民は、精神的には自由である。しかし、流民は、経済的に苦しいし、生活の保証が無い。
定住生活様式で自由な研究をするためには、人々は、金持ちの流民になるしかない。

（初出2020年6月）

定住生活様式中心社会における「集団内定住」

社会の近代化により、交通機関が発達しても、定住民は、基本的には定住状態を続ける。定住民は、生活上の利便性を追求するため、空間移動はある程度する。定住民は、一つの仲良し定住集団内への加入、所属状態の存続を続ける。定住民は、「集団内定住」を維持し続ける。定住民にとっては、移動は、あくまで一時的なものである。定住民は、自分の帰着場所として、きちんとした定住所を用意している。定住民にとっては、その定住所で定住し続けるのがデフォルトである。
定住民による、定住しつつも一時的移動を行うケースは、数多い。しかし、このことは、定住生活様式者が移動生活様式者になったことを意味しない。
（１）定住民は、定住集団内での定期的な転勤と異動に伴う住居移動をする。

（２）定住民は、定住集団を出発して、出張や旅行による空間移動を行った後、自分の定住集団へと帰着する。
営業職の企業メンバーは、日中は、いろいろな他の定住集団を巡回して営業活動しながら、仕事が終わったら自分の定住集団に戻る。
定住民は、社会的分業が進んだ結果、ある程度の空間移動を求められるようになった。定住民は、生活上において、他の定住集団との仕事上のやりとりや、仕事遂行が必要になった。しかし、その定住生活様式者としての本質は変わらない。
定住生活様式者は、旅行にも頻繁に出かけるが、最終的には、いつも必ず、定住所へと帰宅する。定住所は、定住生活様式者にとって定位置である。
定住集団は、例えば、彼らの勤務先の企業、通学先の学校である。
定住集団の住所は、メンバーたちの定住所から離れることが多くなっている。定住集団のメンバーたちの定住所は、メンバー毎に離れることが多くなっている。
定住生活様式者は、定住所から、毎日、通勤、通学によって、定住集団の住所に出向く。彼らは、そこで、次のことを実現する。
（１）集団メンバー相互の再会。
（２）集団メンバー相互の心理的同調、一体化の再現。

最近は、通信環境、ネット環境の社会的整備の進展に伴い、定住生活様式者は、互いに離れた定住所から、毎日、ネット経由で、離れた定住集団の持つ物理的な共有アクセスポイントに相互接続して、「集団内定住」の状態を取り戻す。例えば、彼らは、ネット相互接続により、勤務先の企業、通学先の学校とリモートワークを行う。そうして、各集団メンバーは、あたかも同一の空間で、仲良く相互近接定住をしている気分になる。
同様に、ネット上の匿名掲示板にも、定住民が出現する。

（初出2020年5月）

定住生活様式中心社会における、仲良し定住集団からの追い出しの有無と、流民への社会的差別の

持続

定住生活様式中心社会における、仲良し定住集団は、追い出しの有無の点で、以下の二通りに分類される。
（１）仲良し定住集団からの追い出しがあるタイプ。これは、定住集団の形成を後天的に行う社会に見られる。日本社会とかが典型である。こうした社会では、実質今までどの定住集団に所属していない、まっさら状態の新人を、新卒採用により、正規メンバーとして、集団に加入させる。
こうした集団では、集団メンバー正規性の継続が恣意的になる。人々は、いったん正規メンバーとして定住民になっても、集団から追放されて流民化する。追放の条件は、定住民が、定住集団内で、以下の行為を続けることに失敗することである。
（１－１）集団の周囲メンバーとの同調、一体化。
（１－２）集団の上位者への忖度。
日本社会における「村八分」と呼ばれる慣行が、この集団からの追放行為に当たる。こうしたタイプの社会では、定住民は、心理的に強く緊張し続けなければならない。彼らは、メンタル面での負担、束縛感が非常に強い。彼らは、定住集団からの追放を受けないように、定住集団のために、何でもしないといけない。
例えば、日本の家族集団では、夫婦同姓による後天的な定住集団の実現が行われ、そこに嫁が、まっさらの新人状態で、後天的に加入してくる。しかし、嫁は、いったん正規に定住集団としての家族集団に加入、所属する。しかし、嫁は、その家族集団内で支配的地位に就いている姑に気に入られないといけない。さもないと、嫁は、姑によって、恣意的に一方的に離縁させられる。嫁は、家族集団から追放される。
（２）仲良し定住集団からの追い出しが無いタイプ。これは、定住集団の定義が先天的に決まる社会に見られる。例えば、中韓の社会とかが典型である。こうした社会では、大規模血縁集団、すなわち先天的な定住集団に、誰でももれなく永住できる。その永住の条件は、次の一つだけである。
（１）人々が、集団メンバーの遺伝的子孫として、その集団へと新たに生まれること。
女性は、異なる大規模血縁集団の男性と結婚しても、元の大規模血縁集団に、加入し続ける。
彼らは、正規の集団メンバーでいられる状態が、無条件で永続するため、心理的には気楽である。こうした社会では、集団メンバーの流民

化は、基本的に回避される。

定住生活様式中心社会の流民は、定住集団からの追い出しを恒常的に食らって、その状態が持続している。流民は、社会的な的定住先を持たず、その存在位置は、絶えず流動的である。日本社会における、企業の非正規雇用者とか、この典型である。その点では、こうした定住生活様式中心社会の流民は、移動生活様式中心社会における移動生活様式者と性質が似ている。しかし、定住生活様式中心社会において、こうした流民は、社会から差別され、見捨てられる。その社会的地位は、定住民よりも根本的に低い。彼らは社会的下位者となっている。一方、移動生活様式中心社会における移動生活様式者は、社会で主流の地位を確保している。その点、この二者の社会的立場は、大きく違う。
定住生活様式中心社会の流民は、どこの定住集団からも、邪険に扱われて除外される。彼らは、信用できないよそ者として扱われる。彼らは、よほど有能だったりしない限り、集団内に正規メンバーとして入れてもらうことが、なかなか難しい。定住生活様式中心社会では、
人々は、社会的な定住所を確保し続けることが生活上必須となっている。流民は、こうした社会的な定住所を永続的に失った状態になっている。彼らは、先の見えない厳しい生活の持続を強いられる。

（初出2020年5月）

定住生活様式者の女性と定住集団

定住生活様式の女性は、以下の定住集団に加入し、定住する。
（１）家庭や家族。
（２）勤務先の企業。
（３）通学先の学校の生徒集団。
（４）地域社会（村落。町内会。）
（５）子供の学校の保護者会（PTA）。
（６）自分が信仰する宗教の集団。

（初出2020年6月）

定住集団としての家庭や家族

家庭は、世界的に、人生投資家である女性の根城である。人生投資家の女性は、誰でも、家庭で、男性からの配当生活で、のんびり暮らすことが出来る。
家庭は、定住生活様式では、定住集団の一種である。定住集団としての家庭の存続には、自分の家族が誰かいることが必須である。定住生活様式者の女性は、家族がいないと流民化する。

定住生活様式集団としての家庭における上下関係は、例えば、以下のように捉えられる。

（定住集団の後天的な形成タイプの社会の場合。）
（１）姑
彼女は、完全に、家庭内上位者である。
彼女は、家庭内古参者であり、上位者である。
彼女は、女性優位社会、定住生活様式における上位者である。
（２）嫁
彼女は、家庭内で、上位者と下位者を兼ねる。
彼女は、家庭内新参者であり、下位者である。
彼女は、女性優位社会、定住生活様式における上位者である。
（３）夫と舅
彼らは、家庭内で、上位者と下位者を兼ねる。
彼らは、家庭内古参者の面では上位者である。
彼らは、女性優位社会、定住生活様式では下位者である。（男性は、定住生活様式に不適合な性である。）

（初出2020年6月）

「定住集団＝子宮」論

定住生活様式における定住集団は、人々にとって、子宮や母胎として、捉えられる。
その内部は、安全である。
その内部は、温かい。
その内部は、適度に湿っている。
その内部は、快適である。
その内部は、狭い。
その内部は、収容人員の数において、限界がある。
その内部には、選ばれた者のみが、留まることを、許される。
その内部に留まる者。その内部における、定住民。
彼らは、社会的な上位者である。

（2021年9月初出）

後天的定住集団の社会と、先天的定住集団の社会との差異。政権の打倒の可能性。

後天的定住集団の社会においては、政権トップの座は、永続的に安泰である。
例。日本。

なぜ後天的定住集団の社会の政権のトップは倒れないのか?
単一後天的企業定住集団としての、その社会の国家。
その所有者としての政権トップの血族。
所有者の単一性。
それらに基づく、彼らのライバルとなる存在の、存在不可能性。
社会におけるトップの単極性。
社会トップレベルにおける、集団内調和の絶対視。
それらが、社会的な反乱の芽を全て摘み取る。
今の政権トップを潰しても、新たな代わりの、血の繋がった政権トップが出てくるだけである。
その社会の革命は、トップに政権トップの血族を担ぐ形で起きる。

先天的定住集団の社会である、中国やロシア。

それらの社会では、社会のトップが複数で多極であることを許容する。
そのため、それらの社会では、トップを倒す形で、革命が起きる。
例。ロシア革命。

（2021年9月初出）

後天的定住集団社会との接し方。

後天的定住集団社会との接し方。
後天的定住集団社会の取り扱い説明書。
後天的定住集団社会以外の、他の社会向けのアドバイス。

例。
日本社会。

人々が、女性優位であること。
人々が、上位者に対して、反抗しないこと。
人々が、上位者に対して、隷従すること。
人々が、下位者に対して、専制支配をすること。

その社会の内部における、調和の実現。
そのことへの、社会的な指向性が、とても強いこと。
その実現のために行われる、人々の間における、相互統制。
それが、血縁者同士だけでなく、非血縁者同士にも、広く及ぶこと。
その結果。
その社会の内部が、強い一枚岩であること。
その社会の内部が、強い一元性を、持つこと。

その社会全体が、その社会の最上位者に対して、決して反抗しないこと。

外部社会による、その社会の支配。そのノウハウ。

その社会の最上位者。

例。日本社会。天皇家。

その最上位者を支配すれば、後は、ドミノ倒しの要領で、全自動的に、社会全体を、容易に支配できること。
その最上位者を支配すれば、社会全体が、決して、反抗してこないこと。
その最上位者を永久に支配すれば、その社会全体が、永久に、反抗してこないこと。
その最上位者を永久に支配すれば、その社会全体を、永久に、支配できること。

例。
現状の日本。
アメリカは、日本の天皇家の上に乗っかっている。
日本人は、天皇家を、今まで自力で倒したことが無い。
なので、日本人は、今後、アメリカを自力で追い出すことは、絶対に出来ない。
アメリカが望む限り、アメリカによる日本支配は、永遠に続く。

（2022年2月初出。）

定住生活様式。女性優位社会。出席や同席。欠席や離席。それらの持つ、社会的な意義。

定住民の会合や集まり。
女性優位社会の人々の会合や集まり。

出席者が、欠席者の悪口を言って盛り上がること。
出席者が、そのことで、その場の出席者同士の結束を、盛り上げること。
それは、以下の内容である。
会合や集まりにおける、欠席の社会的な禁止。
会合や集まりにおける、欠席の徹底回避。
その、社会的な推奨。

同席者が、離席者の悪口を言って盛り上がること。
同席者が、そのことで、その場の同席者同士の結束を、盛り上げること。
それは、以下の内容である。
会合や集まりにおける、離席の社会的な禁止。
会合や集まりにおける、離席の徹底回避。
その、社会的な推奨。

離席。
欠席。
それらは、単独行動である。
それらは、抜け駆けの行動である。
それらは、人々の行動面での一体性を、破壊する。
それらの行動の、社会的な禁止や、社会的な非推奨。
例。
企業定住集団における、休暇の取得。
企業定住集団における、遅刻。
それらは、空間的な、時間的な、欠席や離席に、該当する。
それらの行動の、社会的な禁止や、社会的な非推奨。

会合や集まりからの、離脱。
企業定住集団における、一斉休暇。
その実行は、全員が、一斉でなければならない。
その実行には、上位者による許可が、無ければならない。

その場に、最大限、絶え間無く、無限に、永久に、同席し、出席し続けなければ、いけないこと。
時間的に、空間的に、絶え間無い、無限の、永久の、相互拘束。
個人が、それらの状態から逃れること。
その実現が、時間的に、空間的に、絶え間無く、無限に、永久に、不可能であること。
その状態の理想化。

上位者による、下位者に対する、搾取。
上位者による、下位者の家畜化。
上位者による、下位者に対する、専制支配。
上位者による、下位者に対する、優越性の誇示や、いじめや、虐待。
周囲の下位者による、それらの行為に対する、積極的な同調や忖度。

それらの行為が、時間的に、空間的に、絶え間無く、無限に、永久に、続くこと。
下位者が、それらの状態から逃れること。
下位者が、それらの状態から脱出すること。
その実現が、時間的に、空間的に、絶え間無く、無限に、永久に、不可能であること。
そのことの正当化。
そのことの理想化。

上記のルール。
上記の理想。
それは、以下の内容である。
定住生活様式のルール。
定住民のルール。
定住生活様式の理想。
定住民の理想。
女性優位社会の理想。
女性の理想。

女性優位社会における、社会集団。
定住生活様式における、定住集団。
それらは、女性の子宮に、該当する。

（2022年2月初出。）

定住集団における、集団内調和の原則。それを破る人々に対する、社会的な批判の強さ。

定住集団における、集団内調和の原則。
それを乱す、集団内反対者や、集団内抵抗者。
それゆえ、集団内反対者や、集団内抵抗者は、集団全体レベルにおける集団内調和を重視する、多数派の人々から、批判される。
例。日本の野党。
日本の野党は、既存の社会的な多数派である、与党や官庁の政策を批判する。

そのことで、日本の野党は、国家レベルにおける集団内調和を破壊する。
それゆえ、日本の野党は、国家の調和の実現と維持を重視する、多数派の人々から、批判される。

（2021年9月初出）

定住生活様式固有の思想。それらは、集団内調和を重視する。

禅学の無の思想。
周囲環境に、あなた自身を合わせなさい。
周囲環境に、あなた自身を没入させなさい。
周囲環境と、あなた自身とを、調和させなさい。
周囲環境に対して、自己主張しないようにしなさい。
周囲環境に対して、あなた自身の存在を、できるだけ無にしなさい。

京都学派の哲学思想。
鈴木大拙。
白黒の対立は、良くない。
白黒の対立を無くし、両者を一体化させなさい。

西田幾太郎。
白黒を主張する、あなた自身。
それを、白黒を主張しないように、改造しなさい。
そのことで、あなた自身を、調和を守る存在としなさい。

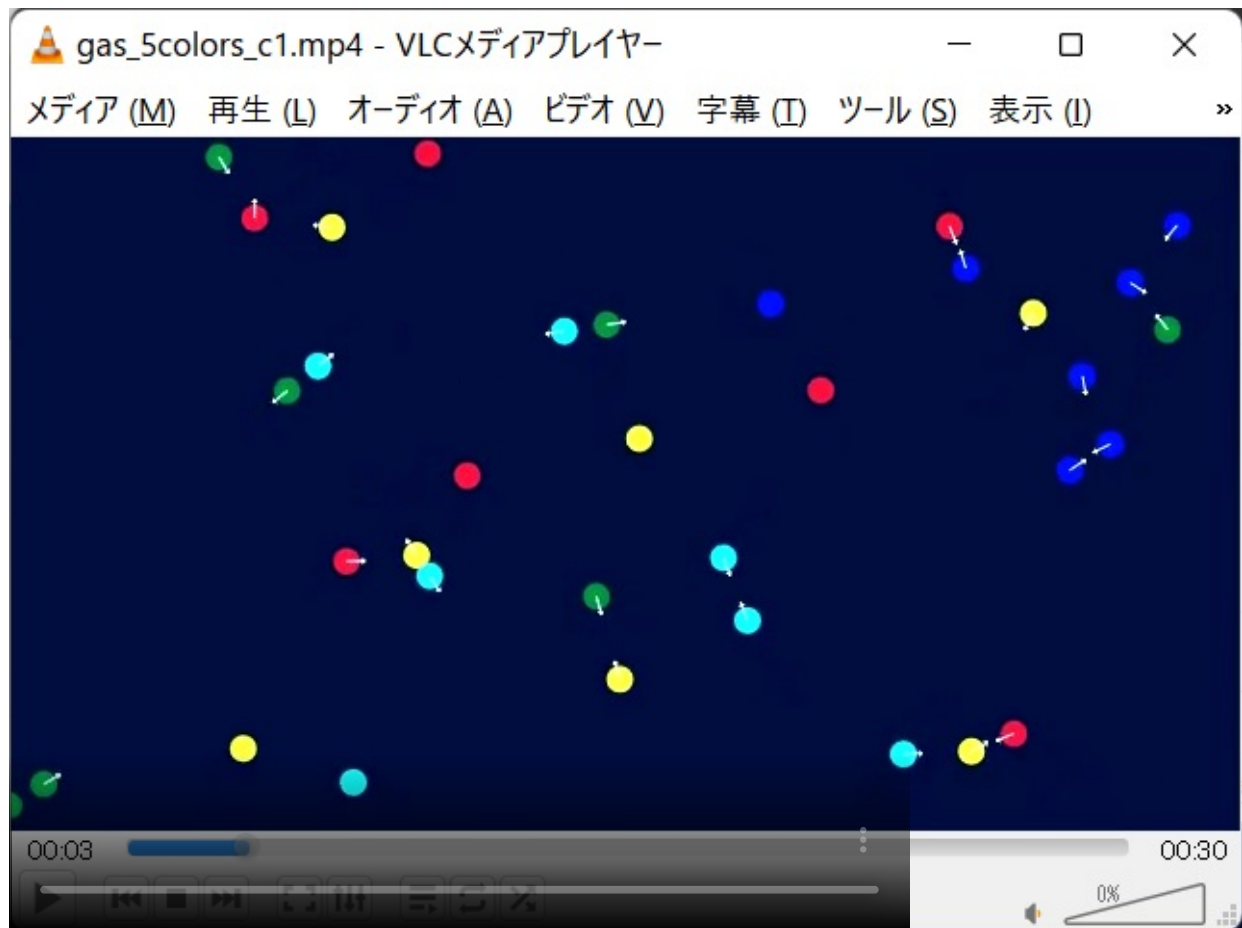
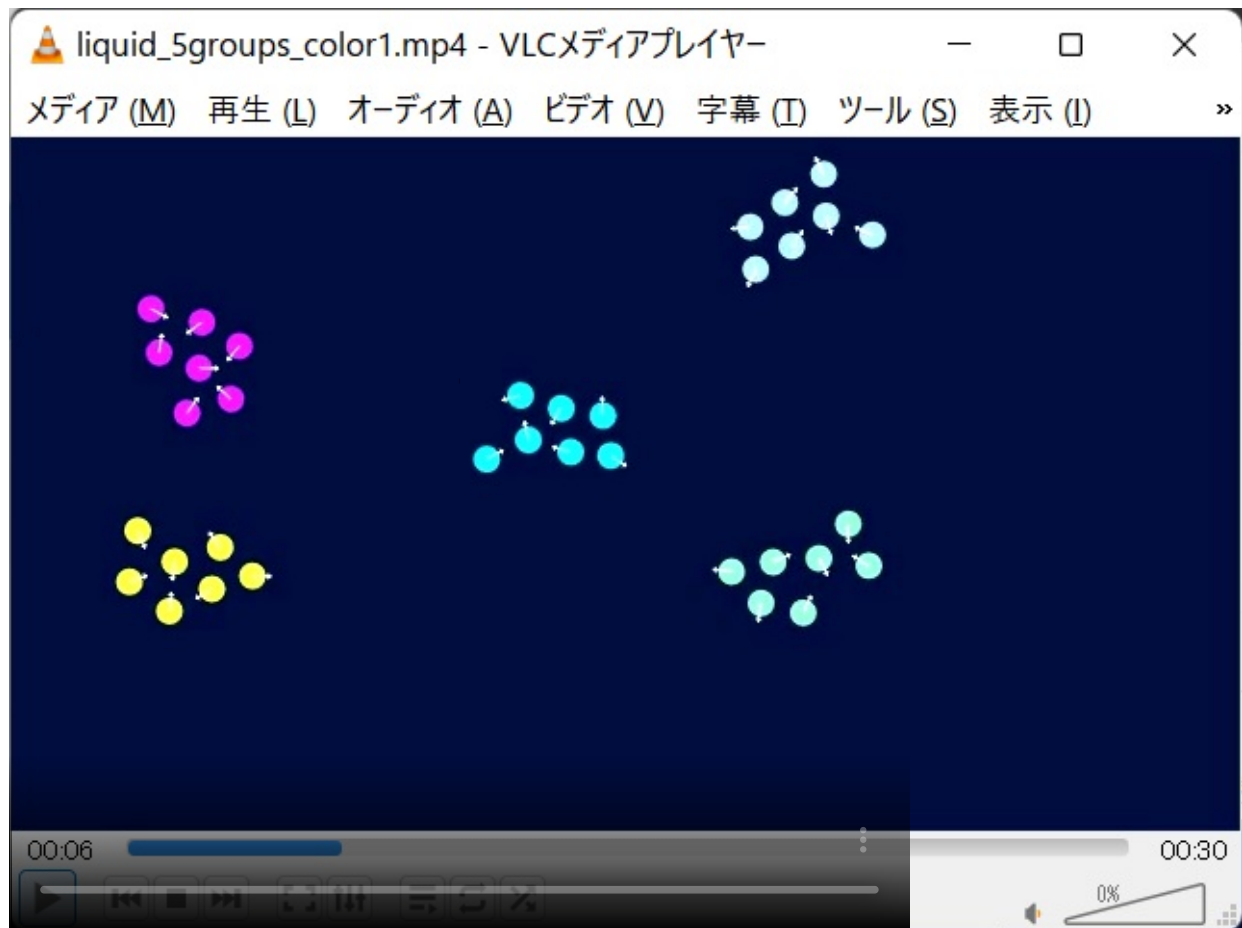
それらは、集団内調和を重視する、定住生活様式固有の思想である。
それらは、同時に、集団内調和を重視する、女性優位社会固有の思想である。

（2021年9月初出）

移動生活様式、定住生活様式の相互関連。

定住生活様式中心社会、移動生活様式中心社会のコンピューター・シミュレーション

定住生活様式中心社会は、液体分子運動で表すことが出来る。
移動生活様式中心社会は、気体分子運動で表すことが出来る。

（ご紹介）液体（定住生活様式）、気体（移動生活様式）の分子運動の動画について。
シミュレーション動画（１）。気体分子運動。ドライな感覚。精子の行動。男性的行動。父性的行動。移動生活様式。乾燥地帯における食糧確保行動。遊牧と牧畜の生活。個人主義。自由主義。非調和主義。先進性。地域の例。欧米。中東。モンゴル。

シミュレーション動画（２）。液体分子運動。ウェットな感覚。卵子の行動。女性的行動。母性的行動。定住生活様式。湿潤地帯における食糧確保行動。農耕の生活。集団主義。反自由主義。調和主義。後進性。地域の例。中国。韓国。日本。ロシア。

筆者による、次の書籍を参照して下さい。

"気体と液体。行動や社会の分類。生物や人間への応用。"

定住生活様式中心社会は、液体分子運動で表すことが出来る。一つ一つの液体分子が一人一人の個人に相当する。
各個体は、以下のことを続ける。
（1）各個体が、居場所を、一箇所に集約して、集団を形成して、集団に所属する。
（2）各個体が、集団内部に定住して、動かない。
（3）各個体は、集団メンバーに気配りして、仲間外れにされないようにする。
（4）各個体が、集団の中心部に入ろうとする。

移動生活様式中心社会は、気体分子運動で表すことが出来る。一つ一つの気体分子が一人一人の個人に相当する。
各分子は、以下のことを続ける。

（１）各個体が、粗放的に離散して、バラバラになる。
（２）各個体が、オープンになり、ランダムアクセス可能になる。
（３）各個体が、周囲から自立独立し、独自判断で、様々な方向へと動く。
（４）各個体が、高速で移動する。
（５）各個体が、未知の領域に進出する。

（初出2020年5月）

移動生活様式、定住生活様式と、「一時的集合」、「集団内定住」。

移動生活様式においては、人々は、個人単位で、バラバラに、互いに無関係に行動する。人々には、生活上、何か、多人数で行う必要がある用事ができる。すると、人々は、一時的に同じ場所に集まる、「一時的集合」を行う。これは、例えば、人々が、一時的な稼ぎを得るために、自動車とかの生産設備でいっしょに働く場合である。あるいは、人々が、議場で政治的討論をする場合である。そこでは、個人同士が、互いに、見知らぬ他人を信頼する。その手段として、「契約」が重視される。
一方、移動生活様式において、人々は、「定住生活様式」を続ける側面がある。それは、人々による、血縁集団への「集団内定住」である。血縁集団は、遺伝的子孫同士でつながった、縁故性の強い集団である。そこでは、人々の間で、仲間意識や、相互扶助の意識が強い。
血縁集団は、人々には、先祖代々にわたって居住し続ける「定住集団」として捉えられる。人々は、移動生活様式をしながら、自分の血縁集団に定住し続ける。
血縁集団への「集団内定住」が発生することは、移動生活様式と定住生活様式とで、共通である。
定住生活様式では、人々は、「集団内定住」を、非血縁者同士でも、普通に行う。
一方、定住生活様式においても、互いに無関係な人々同士による「一時的集合」が起きる。それは、例えば、流民同士が、一時的な仕事を斡旋する業者によって、同じ職場に、一時的に寄せ集められる場合である。あるいは、同じコンサート会場に、バラバラな観客の人々が、

一時的に集合する場合である。ここで、観客の人々は、例えば、互いに無関係な定住集団から出かけてきた、定住民同士である。

（初出2020年6月）

既得権益の打破の必要性。定住集団が抱える問題。

人間社会においては、以下のことの実現が必要である。
（１）社会の衰退防止と、活性化の維持。
（２）社会の固定化の打破。社会の流動性の確保。
（３）社会的弱者の救済。

そのためには、次のものを作る必要がある。
「次のことを、常時可能にする、社会的仕組み。」
「社会的強者と、社会的弱者との交代。」

それにより、次のことが実現する。
（１）人々の社会的地位が、無能者であれば、落下する。
（２）人々の社会的地位が、有能者であれば、上昇する。

そのためには、以下のことの実現が必要である。
（１）既得権益の占有禁止。
（１－１）既得権益の解放。その再分配。
（１－２）その定期化。
（１－３）その制度化。

既得権益は、定住集団に蓄積する。
定住集団は、移動生活様式でも、定住生活様式でも、両方に存在する。
人々は、「定住生活様式」を続ける側面がある。それは、定住生活様式のみならず、移動生活様式においても、発生する。
それは、人々による、血縁集団への「集団内定住」である。
血縁集団は、遺伝的子孫同士でつながった、縁故性の強い集団である。そこでは、人々の間で、仲間意識や、相互扶助の意識が強い。血

縁集団は、人々には、先祖代々にわたって居住し続ける「定住集団」として捉えられる。人々は、移動生活様式をしながら、自分の血縁集団に定住し続ける。

定住集団は、以下のように分類される。そこでは、既得権益の蓄積と維持が発生する。
（１）血縁。家族。ファミリー。例えば、王家。
（２）地縁。例えば、富裕層。彼らは、既得権益を持つ。彼らは、専用の居住区を持つ。
（３）企業。例えば、日系の企業。そこでの従業員の終身雇用。

人々は、次の内容を問題視する。しかし、それらは、実は、既得権益の問題の本質ではない。それは、目くらましである。
（１）自由競争。それは、社会にとって必要である。
（１－１）それは、次のことのきっかけになる。
「競争で勝利し、成功を収めた人々が、既得権益を生み出すこと。」
それは、確かに問題である。
（１－２）しかし、それは、アイデア面での新機軸が出るきっかけである。
それは、実は、既得権益を崩すきっかけである。

（２）市場経済。それは社会にとって必要である。
人々は良質な生活を送りたい。そのためには、次のことが必要である。人々の好きな物品や情報。それらの、自由な入手。それは、市場経済によって、実現する。
女性優位社会の人々は、上記の内容を敵視する。彼らは、管理や統制が好きである。しかし、それは、社会の質の低下をもたらす。それは、駄目である。

既得権益の問題の本質は、実は、次の通りである。
（１）人々が自由競争で得た富。それらが、血縁等の定住集団の内部で、閉鎖的、排他的に、伝承されること。
（２）そうした有力な定住集団に入れない人たちが、永続的に割りを食うこと。
（２－１）有力定住集団のメンバーの限定化。その世代間伝承。
（２－２）上流集団の発生と、その維持。上流階級や貴族の地位の、世代間伝承。
（３）そうして、人々の生活水準の格差が、世代を超えて固定化する

こと。

それらの根底にある、問題の根本的な本質は、次の通りである。

（１）女性性。女性が持つ、既得権益を保持し続けようとする体質。
既得権益の打破にとって、「女性性の打破」が必須である。
定住生活様式や、定住集団は、その性質が、女性優位である。
その面倒な性質は、次の通りである。それらは、打破される必要がある。

（１－１）自己保身性の重視。人々は、既得権益を、自己保身の道具に使う。

（１－２）自己中心性の重視。
（１－２－１）特権を持つことの重視。人々は、貴族性を好む。
（１－２－２）見栄を張ることの重視。人々は、次のことを、嫌う。
もしも、彼らが、既得権益を失った、とする。すると、彼らの間に、次の状態が発生する。
（Ａ）地位の低下。（Ｂ）名声の低下。（Ｃ）みんなから注目される度合いの低下。

（１－３）排他性の重視。人々は、次のことを指向する。
「既得権益を、集団内部で独占すること。」
（１－４）現状維持の重視。人々は、既得権益を得た、有利な現状を、維持しようとする。人々は、変化を嫌う。

（２）有能者の遺伝子の世代間伝承。
血縁定住集団では、有能者は、世代間で、有能さを遺伝させる。
有能者は、そうして、彼らによる既得権益の独占状態を、いつまでも維持する。例えば、社会的地位の高さ。

既得権益の問題は、有能者と無能者の問題である。それは、以下のように捉えることが出来る。
（３－１－１）上流集団の有能者。その有能さの世代間伝承。彼らは社会に役に立っていれば、それで、特に問題ない。
（３－１－２）上流集団の無能者。彼らの上流集団への滞留。それは、大きな問題である。上流集団の無能者を、下に落とす仕組みが、

社会的に必要である。
（３一２－１）下流集団の有能者が、上に行けるようにすること。それは、社会的に重要である。そこでは、彼らの実務面での有能さを評価する仕組みが重要である。
（３－２－２）下流集団の無能者には、社会福祉の利用によって、何とか生きてもらう。

（初出2020年7月）

强不安集団、强不安社会と定住生活様式者・弱不安集団、弱不安社会と移動生活様式者。

不安感の强いメンバーからなる集団。それは、强不安集団と呼べる。それは、安全性を追求する。それは、安全性が高度でないと、不安を感じ、事業などの進行に対して、すぐにNGを出す。
强不安集団。それは、定住生活様式者の集団。それは、女性優位の集団。
强不安社会。それは、定住生活様式中心社会。それは、女性優位の社会。例。日中韓。ロシア。

不安感の弱いメンバーからなる集団。それは、弱不安集団と呼べる。それは、リスクを追求する。それは、安全性が低くても、不安を感じず、事業などの進行に対して、OKを出す。
弱不安集団。それは、移動生活様式者の集団。それは、男性優位の集団。
弱不安社会。それは、移動生活様式中心社会。それは、男性優位の社会。例。欧米諸国。

（初出2020年11月）

調和集団、調和社会と定住生活様式者。非調和集団、非調和社会と移動生活様式者。

調和。その意味。それは、辞書的には、以下の通りである。（出典元サイト。「コトバの意味辞典。」（日本語サイト。））
（１）ばらばらに感じないこと。まとまっていること。割れないこと。
（２）矛盾や衝突が無いこと。仲良くしていること。
（３）偏りが無いこと。釣り合っていること。
（４）個性の主張が強過ぎないこと。足並みが揃っていること。

調和を重んじる集団。それは、調和集団と呼べる。

調和集団。それは、定住生活様式者の集団。それは、女性優位の集団。それは、液体分子運動パターン。
調和集団の社会は、調和社会と呼べる。その社会は、全体行動における調和を重視する。その社会は、意見の割れを回避する。その社会は、調和を乱すメンバーを、社会から追放する。例。定住生活様式中心社会。女性優位の社会。日中韓。ロシア。

調和集団や調和社会では、意見を割る公開討論会が機能しない。その社会では、議会制民主主義が機能しない。世界中で、その傾向がある。
意見を割る公開討論会が機能するのは、非調和集団のみ。議会制民主主義が機能するのは、非調和集団のみ。
非調和集団。それは、移動生活様式者の集団。それは、男性優位の集団。それは、気体分子運動パターン。
非調和集団の社会は、非調和社会と呼べる。その社会は、全体行動における調和を重視しない。その社会は、意見の割れを、容認する。その社会は、調和を重んじないメンバーが主流である。例。欧米諸国。

調和集団や調和社会。一般に、集団や社会では、批判者や反対者は、メンバー間での意見の割れを招く。それは、集団や社会の調和を乱す。そのため、批判者や反対者は、調和集団や調和社会から、嫌われ、抹消される。調和社会では、議会において、与党を批判する野党が、万年少数派状態になりやすい。あるいは、調和社会では、議会において、全会一致の大政翼賛の状態が生まれやすい。あるいは、調和

社会では、反対者や批判者が生息不可能な一党独裁が生まれやすい。
また、調和社会では、労働組合の力が弱い。労働組合は、企業における所有層や経営層を批判して、労使の仲を割ろうとする性質を持つ。それは、企業内部の調和を乱すとして、社会的に嫌われる。労働組合は、企業で力を持つことができない。

（初出2020年11月）

調和集団と外れ値。定住生活様式者社会と外れ値。

調和集団は、相互の一体化、同調、協調、和合を理想化する集団である。

定住集団や定住生活様式者社会は、調和集団である。
調和の達成と維持が、定住生活様式者社会の至上命題である。

調和集団の形成と維持を目指す性。それは、女性である。彼女らは、調和集団の支配者である。
血縁関係者同士で、調和集団の形成と維持を目指すのが、先天的定住集団である。例えば、中韓。
血縁関係の無い人間同士で、調和集団の形成と維持を目指すのが、後天的定住集団である。例えば、日本。

調和集団では、全体の調和を促すムードメーカーが重用される。
調和集団では、外れ値の者は、全体の調和を乱す、厄介者である。それは、調和集団にとって、排除の対象である。

液体分子運動パターンが、調和集団に当たる。気体分子運動パターンが、外れ値集団に当たる。

外れ値のメンバー。それは、次のような人たちである。異質な者。障害者。異能力を持つ者。異民族の者。
外れ値のメンバー。それは、次のような人たちである。
速すぎる人。遅すぎる人。動作パターンが違う人。非同調者。調和集団の動きに付いていけない人。

外れ値を調和値化する努力。同化の努力。調和集団側。外れ値側。その両方が努力している。しかし、それは失敗に終わる。

調和集団から、外れ値のメンバーに対して下される処分。それは以下の通りである。
（１）同化の絶えざる強要。しつけ。しごき。体罰。いじめ。
（２）外れ値の追放。村八分。流民化を強要すること。
（３）外れ値の抹殺。外れ値の消去。外れ値のメンバーに自殺を強要すること。

外れ値は、ユニークな個性を持っている。外れ値は個性的である。外れ値は、有能であることも多い。外れ値は、上手く生かせば、有益であることも多い。外れ値は、イノベーターになる。
外れ値メンバーだけを集めて、各々が自由に勝手に動くことを許容する、外れ値隔離集団。外れ値隔離牧場みたいな存在。それが、調和集団で動く社会には、本来必要である。
外れ値メンバー集団の治外法権化が必要。それは、外れ値メンバーの才能を生かす上で、必須である。
調和集団メンバーが、外れ値メンバーに対して、嫉妬する問題。それは根深い。調和集団メンバーは、以下のような感情や主張を持ちやすい。「外れ値メンバーを特別扱いするな！外れ値メンバーに良い思いをさせるな！外れ値メンバーに楽をさせるな！外れ値メンバーは、集団の害悪だ！外れ値メンバーは、社会のゴミだ！」外れ値メンバー集団の治外法権化は、それゆえ、困難である。

外れ値のメンバー自身が、調和集団を理想化する考えを持っている問題。それは、先天的、後天的に、メンバーに付いて回る。それは、解決しにくい。

全員外れ値の移動生活様式者社会。全員が個性的な移動生活様式者社会。移動生活様式者社会は、外れ値集団である。例えば、アメリカ。
外れ値集団の形成と維持を目指す性。それは、男性である。彼らは、外れ値集団の支配者である。
外れ値を推奨する移動生活様式者社会。それは、メンバーの強烈な個性を追求する。それは、民主主義の根幹をなす。
調和追求を排除する移動生活様式者社会。それは、定住生活様式者社会と反対の問題をはらんでいる。
移動生活様式者社会における調和集団。それは、人種である。

建前で移動生活様式者社会を賛美する、定住生活様式者社会。
移動生活様式者社会は、一時期、世界標準であった。それは、强力であった。一部の定住生活様式者社会は、外面では、それに迎合し従う素振りを見せる。例えば、アメリカを礼賛する日本。しかし、定住生活様式者社会は、内心ではそれを全く許容できない。定住生活様式者たちは、調和集団を理想化し続ける。定住生活様式者たちは、外れ値の者に対して、辛く当たり続ける。そこでは、外れ値の者は、苦しい生活を强いられる。この問題は、解決しない。

（初出2020年11月）

移動生活様式、定住生活様式の次元と、個人生活、集団生活の次元との相互関連

生物や人間の生活のあり方の分析においては、以下の二次元を別々に分ける方が良い。
（１）移動生活様式、定住生活様式の次元。
（２）個人生活、集団生活の次元。

これらの分析次元の組み合わせにより、以下の対比を行うことが可能である。
（１）集団移動生活様式と個人移動生活様式の対比。
集団移動生活様式は、例えば、飛行生活能力を備えたバッタの大群や、渡り鳥の大群である。一方、飛行生活能力を持たず、専ら地上生活を送る人間による、侵攻する軍隊の移動は、一見、集団移動生活様式に見える。しかし、彼らは、自分たちでは、自活する形では生活できない。彼らは、その生活を、後方からの補給に絶えず頼る。
個人移動生活様式は、例えば、飛行生活能力を持たず、専ら地上生活を送る、人間の遊牧民の牧者生活である。
（２）集団定住生活様式と個人定住生活様式の対比。
集団定住生活様式は、例えば、人間の農耕民の村落での仲良し集団形成に基づく定住生活様式である。
個人定住生活様式は、例えば、定住生活様式中心社会で、社会的引きこもりをやっている人たちである。
筆者は、これを、男女の遺伝的性差と、それに基づく遺伝的能力差に

当てはめた。
（１）進化の現状
（１－１）男性は、生活面での個人性と移動性を兼用する形で進化している。
（１－２）女性は、生活面での集団性と定住性を兼用する形で進化している。
（２）優位になる環境条件
（２－１）男性は、生活面での個人性と移動性の両方が揃う環境で優位に立つ。
（２－２）女性は、生活面での集団性と定住性の両方が揃う環境で優位に立つ。
飛行生活能力を持たない、地上生活中心か地上生活限定の生物の生活では、
（１）集団生活と定住生活様式の相性が良い。
（２）個人生活と移動生活様式の相性が良い。
人間の生活は、このタイプである。
集団移動生活様式の実現は、昆虫や鳥類みたいに飛行できないと、生物としては、難しい。

（初出2020年5月）

定住生活様式、移動生活様式における仕事の範囲や、やり方

仲良し定住集団の仕事の範囲や、やり方は、以下の二通りに分類される。
（１）ゼネラリスト。彼らは、その時々に発生する新しい仕事を、内容非限定で、何でもやるし、できる。彼らは、その時々の流れに何でも飛びつく。例えば、日本社会では、中央省庁の事務官、企業の事務員、職業としての便利屋など。
（２）スペシャリスト。彼らは、やることを特定の内容に限定して、極めようとする。彼らは、時流に合わせず一定の道を行くことをひたすら続ける。例えば、日本社会では、中央省庁の技官、大学の学者、

職業としての職人など。
現実の定住生活様式中心社会では、このゼネラリストとスペシャリストとの両者は、絶えず勢力争いをしている。どちらの存在も、定住生活様式では、伝統的で目新しくない。
上記の分類は、移動生活様式におけるメンバーシップ型とジョブ型の仕事分類と、合致しない。定住集団では、スペシャリストは、集団の正規メンバーであり、かつ仕事内容限定で動く。
ゼネラリストとスペシャリストは、移動生活様式でも、定住生活様式でもどちらでも並行して存在する。移動生活様式では、その都度、進出する新天地への環境適応が強制される。このことは、移動生活様式の人々に対して、以下のような二つの傾向を、同時に強く生み出す。
（１）ゼネラリスト。彼らは、その都度、何が来ても何でも適応できる。
（２）スペシャリスト。彼らは、個人主義で動き、個人単位で、環境適応のための専門的なスキルを向上させる。
今の日本のような定住生活様式中心社会では、人々は、スペシャリストと個人主義とを混同する。

（初出2020年5月）

移動生活様式、定住生活様式と領土拡張の度合い

移動生活様式では、生活領域や領土の拡張と縮小が起きる。その拡張や膨張は、高速でダイナミックなものである。それは、空気の風船が一気に膨らむような感じである。
定住生活様式は、生活領域や領土の拡張があまり起きない。

（初出2020年6月）

定住生活様式、移動生活様式と、生活条件の有利さ。

定住生活様式の方が、移動生活様式よりも、生活的には条件が良く、有利で、恵まれている。
移動生活様式は、定住生活様式に比べて、生活条件が苛酷で、不利である。
このことは、女性の方が、男性よりも、生存条件で恵まれているのと同じである。

（初出2020年6月）

流民と定住民と差別。

定住民による流民差別。その解消は不合理である。それは、決して無くならない。その理由は、人間が、空を飛べない重力依存生活者だからである。重力依存生活者は、陸上か、海上で、縄張り、占有領域を作って行動しようとする。人間の持つ縄張り意識が、この差別を恒常的に生み出している。人間は、定住民になりたがる。人間においては、定住生活様式者が優位である。移動生活様式者は、その暮らす環境が定住不可能である。なので、彼らは、仕方なく、恒常的、定期的に移動しているだけである。その典型は、渡り鳥である。移動生活様式者は、その不安定な生活を正当化しようとして、次のようなアピールを必死になって行う。「私は有能な転職者だ！」
移動生活様式者にも、長期的には移動しつつも、ある程度の期間にわたって一時的に定住する人がいる。彼らは、相対的に定住民である。彼らは、定住出来ない人たちを、流民と呼んで、見下し、差別する。
定住出来ない人たち。それは、縄張りを失った人たちである。それは、先祖代々にわたって縄張りを持てない人たちである。
これは、定まった領地を持てない、流浪の民である、西欧のユダヤ人や、トルコのクルド人への差別が典型的である。

土地の食糧の生産性の高さ。食べ物へのあり付きやすさ。真水の得やすさ。水分の補給しやすさ。洪水での流されにくさ。これらについて

は、定住生活様式者が有利であり、優位である。
痩せた土地の定住民や、水を得にくい定住民や、洪水で流されやすい定住民。彼らは、流民化しやすく、見下しの対象となる。

移動生活様式者は、モンゴルの騎馬民族のように、定住性をほとんど捨てて、土地への執着を無くし、高性能な流民となって、高速移動できるようになる。すると、彼らは、定住生活様式者に対して、機動性の高さの面で、優越感が生じる。彼らは規模の壮大な大きな広い国を作る。彼らは、周囲に、積極的に攻め込む。彼らは、そうして、定住民を、軍事的に支配下に置く。彼らは、地上での農耕メインの定住民を見下す。それは、流民による定住民への差別である。それでも、彼らの間には、定住民同様の、騎馬の餌場の縄張りの問題が存在する。

定住生活様式中心社会の定住民は、定住集団を作って、その中に入れてもらおうとする。また、定住民は、その中で、仲良しでいようとする。彼らは、閉鎖的で排他的である。彼らは、外部から来た人々を、旅人や流民と呼んで警戒し、中に入れない。旅人の中には、定住民と流民がいる。定住民の旅人は、彼自身の定住集団を持っていて、そこから一時的に移動した後、元の定住集団に戻る。彼らは、旅行中は、社会的に多少は信頼される。流民の旅人は、定住集団を、そもそも持っていない。彼らは、社会的に全く信用されない。定まった定住集団を持てない流民の人たち。定住民は、彼らを見下し、仲間外れにし、差別する。
これは、日本の非正規雇用者への差別が典型的である。

（初出2020年11月）

定住生活様式を移動生活様式に修正する方法。移動生活様式を定住生活様式に修正する方法。

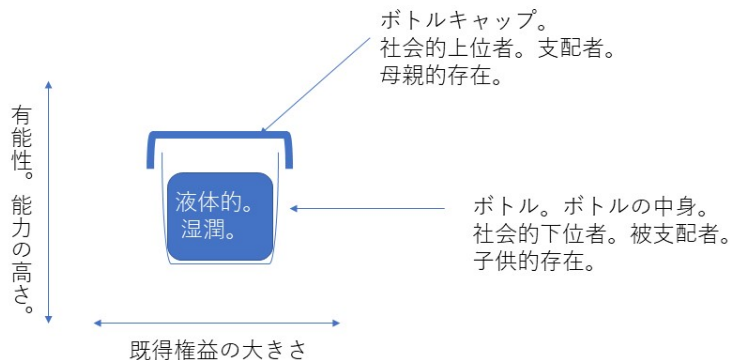
人々は、その定住生活様式を移動生活様式へと修正するには、農耕生活を、遊牧や牧畜の生活にする。
そのために、人々は、植物栽培主体の食生活を止めて、家畜を活用し

た食生活にすべきである。
対策は、以下の通りである。
（１）人々は、今の土地の自然環境で、家畜の放牧、牧畜が大規模に可能になる方法を考える。
（１－１）人々は、遺伝子工学の技術を応用して、新たな種類の牧草を研究開発する。
（１－２）人々は、今住んでいる土地に、新たな種類の牧草をいろいろ試験導入する。
（１－３）人々は、収穫量が大きく向上する牧草の種類を増やしていく。
（２－１）人々は、現在の家畜以外で、家畜になる動物の種類を、新たに増やす。
（２－２）人々は、様々な種類の家畜の肉や乳製品を食べる。

人々は、その移動生活様式を定住生活様式に修正するには、遊牧や牧畜の生活から、農耕生活にする。
そのために、人々は、遊牧や牧畜主体の食生活を止めて、植物栽培主体の食生活にすべきである。
対策は、以下の通りである。
（１）人々は、今の土地で、植物栽培の収穫量を大きく上げる方法を考える。
（１－１）人々は、遺伝子工学の技術を応用して、新たな種類の栽培作物を研究開発する。
（１－２）人々は、今住んでいる土地に、新たな種類の作物をいろいろ試験導入する。
（１－３）人々は、収穫量が大きく向上する作物の種類を増やしていく。
（２）人々は、現在の家畜飼料の穀物を、家畜に回さず、人間が直接食べる。
（２－１）人々は、料理がより美味しくなるように、穀物の調理方法を工夫する。
（２－２）人々は、穀物がより美味しくなるように、穀物の品種改良をする。

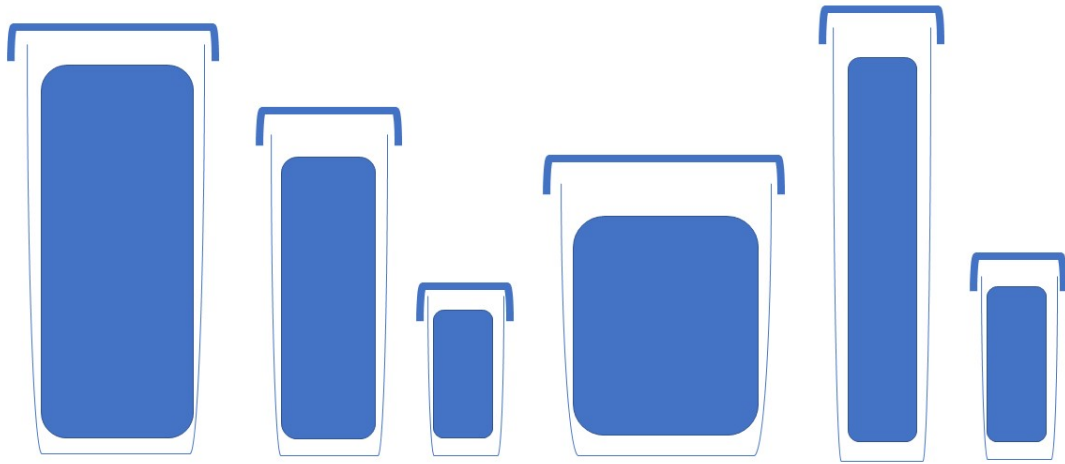
（初出2020年5月）

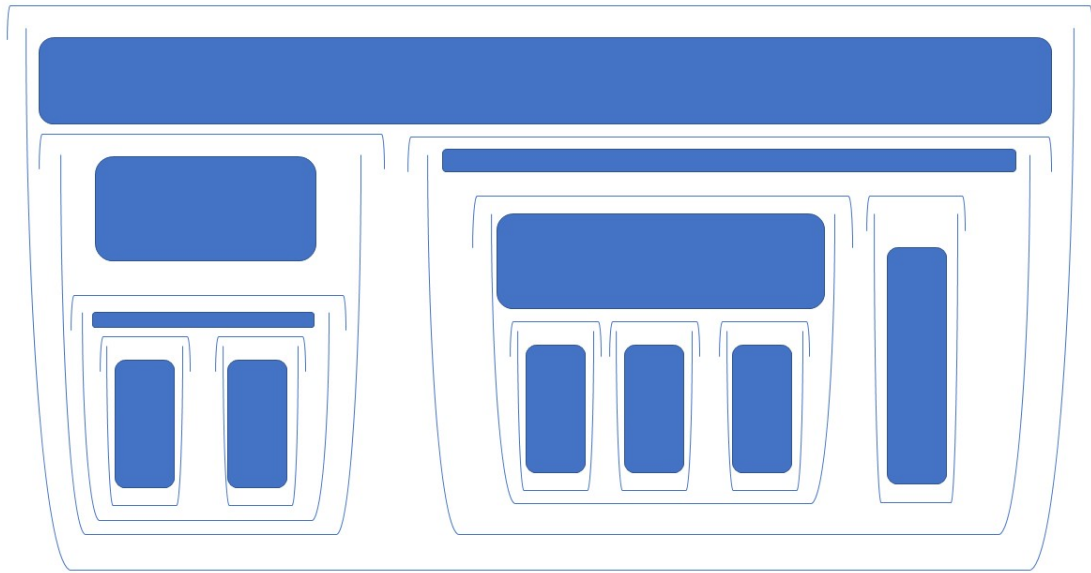
ボトル型社会。エアコン型社会。

定住生活様式。女性優位社会。定住集団。
それは、以下のように表現可能である。
ボトル。ボトルの容器。
それは、外界に対して、閉じた存在である。
ボトル型社会。
その社会における、上位者や支配者。母親的存在。
それは、以下のように表現可能である。
ボトルキャップ。ボトルにおける、最上位の存在。ボトルを締める存在。ボトルを閉める存在。ボトルを占める存在。
ボトルの中身の社会関係。液体的。湿潤。調和主義。

ボトル型社会の構造。

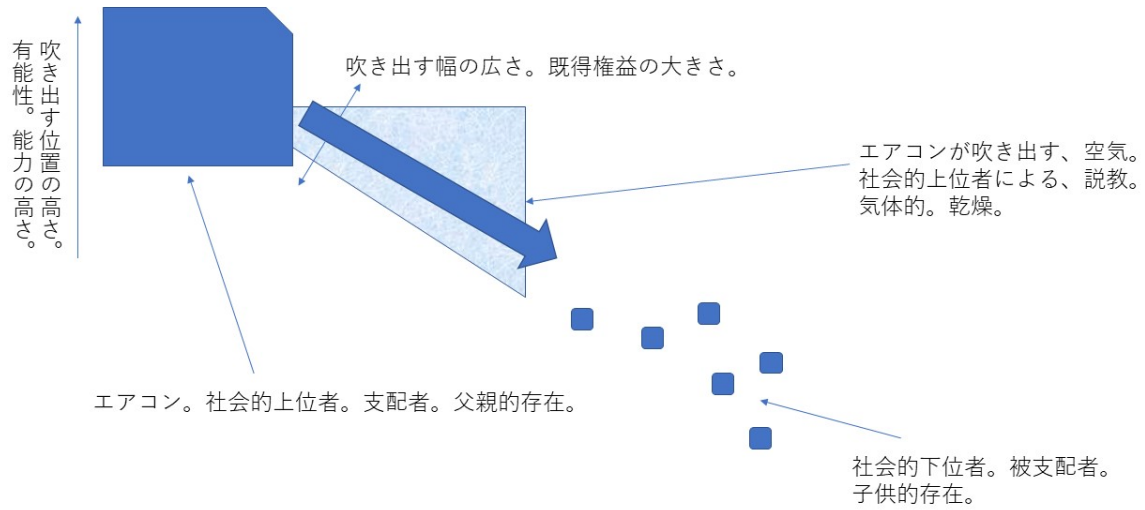
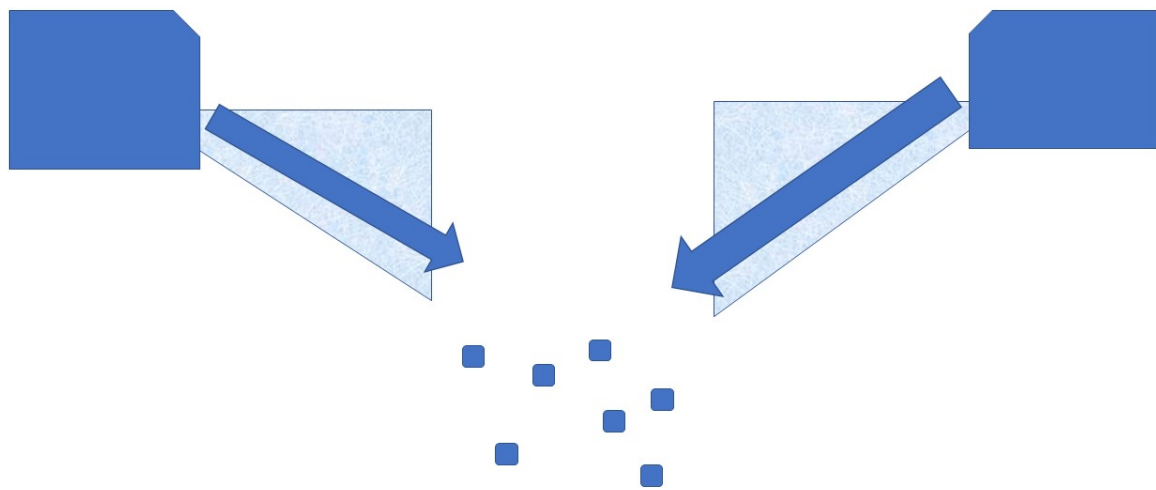
ボトル型社会。その分類。

////
（1）
単層ボトル型社会。
上下に一層の各ボトル同士が、横並びの状態で、互いに、覇権を求めて、高さと幅の広さを競い合う社会。

その高さ。それは、有能性である。
その幅の広さ。それは、既得権益の大きさである。
例。中韓。先天的定住集団の社会。
各ボトルは、血縁集団に対応する。

単層ボトル型社会。

//
（２）
多重ボトル型社会。
各ボトルや、各ボトルキャップが、一番上で一番外側の、一層の上位ボトルの下や内側に、多重に、多層に、組み込まれている社会。
各ボトル同士が、それぞれの上位ボトルの中で、互いに、覇権を求めて、高さと幅の広さを競い合う社会。
その高さ。それは、有能性である。
その幅の広さ。それは、既得権益の大きさである。
例。日本。後天的定住集団の社会。
一番上の層のボトルは、日本の天皇家に対応する。
各ボトルは、後天的に、その場で、適当に生成される。

多重ボトル型社会。

////

移動生活様式。男性優位社会。
それは、以下のように表現可能である。
エアコン。
それは、外界に対して、開いた存在である。
エアコン型社会。
その社会における、上位者や支配者。父親的存在。
それは、以下のように表現可能である。
エアコンの空気吹出部。吹き出た空気の影響力が、広域に拡散すること。
その位置の高さ。それは、有能性である。
その幅の広さ。それは、既得権益の大きさである。
複数のエアコン同士が、普遍性を獲得しようとして、覇権を競うこと。
エアコンの空気の社会関係。気体的。乾燥。個人主義。自由主義。

<u>エアコン型社会の構造。</u>

<u>複数エアコン型社会の構造。</u>

（2022年1月初出。）

移動生活様式、定住生活様式と、男女の性差。

性差による移動生活様式、定住生活様式への適合度合いの違い

（１）男性優位
（１－１）移動生活様式は、遺伝的心理構造の面で男性向きである。移動生活様式中心社会は、男性優位社会になる。
（１－２）父親は、移動生活様式中心社会の中核である。彼は、社会の生成者、支配者である。
（２）女性優位
（２－１）定住生活様式は、遺伝的心理構造の面で女性向きである。定住生活様式中心社会は、女性優位社会になる。
（２－２）母親は、定住生活様式中心社会の中核である。彼女は、社会の生成者、支配者である。

（初出2020年5月）

精子、卵子双方の動きの相違がもたらす、男性性、女性性と移動生活様式、定住生活様式との根本的な関連

男女の性差の分析においては、以下の視点に着目することが、根本的に重要である。
１．男性性と女性性について、取るべき視点
（１）男性性（捨て身の性質。自己拡大の性質。）を、遺伝的な精子的性質として捉える視点。
（２）女性性（自己保身の性質。自己中心的性質。）を、遺伝的な卵子的性質として捉える視点。

２．社会的な男性優位と女性優位について、取るべき視点
（１）男性側
（１－１）男性が社会的に優位になる条件を解明する視点。
（１－２）遺伝的な精子的性質としての男性性が、生活上必須となる条件を解明する視点。
（２）女性側
（２－１）女性が社会的に優位になる条件を解明する視点。
（２－２）遺伝的な卵子的性質としての女性性が、生活上必須となる条件を解明する視点。
３．移動生活様式、定住生活様式と性差との関連について、取るべき視点
（１）男性の精子を、絶えず動き回る、移動生活様式者として捉える視点。
（２）女性の卵子を、一か所に止まって動かない、定住生活様式者として捉える視点。
４．移動生活様式、定住生活様式と男性優位、女性優位との関連について、取るべき視点
（１）環境適応上、環境が人間に移動生活様式（遊牧、牧畜）を要求する移動生活様式中心社会は、生殖面での移動生活様式者の精子を持つ男性と相性が良い。移動生活様式中心社会は、男性優位の男性優位社会になる。
（２）環境適応上、環境が人間に定住生活様式（農耕）を要求する定住生活様式中心社会は、生殖面での定住生活様式者の卵子を持つ女性と相性が良い。定住生活様式中心社会は、女性優位の女性優位社会になる。

（初出2020年5月）

定住生活様式、移動生活様式と、その適性面での性差

定住生活様式は、女性向きである。女性は、定住生活様式を実現する人である。女性は、人間社会を、定住生活様式向きに、切り替え、改造する能力者である。女性は、人々を定住生活様式に適応させるため

の原動力、ツールである。

（１）生活上、人々の間では、一度得た前例の有効性が永続する。
人々は、チャレンジをしなくてよい。
これは、女性性である。（自己保身性。）
女性は、前例があること以外しない。女性は、チャレンジが嫌いである。
（２）生活上、人々は、定住集団への永住が必要である。
これは、女性性である。（自己保身性。）
女性は、どこかの集団に所属して、身の安全を図るのを好む。
（３）生活上、人々は、定住集団内部での、相互和合、仲良し状態の維持が必要である。
これは、女性性である。（自己保身性。）
女性は、互いに、同調、一体化、忖度することを好む。

移動生活様式は、男性向きである。男性は、移動生活様式を実現する人である。男性は、人間社会を、移動生活様式向きに、切り替え、改造する能力者である。男性は、人々を移動生活様式に適応させるための原動力、ツールである。
（１）生活上、人々は、新天地へ進出を続けることが必要である。その都度チャレンジが必要である。
これは、男性性である。（捨て身の性質。）
男性は、前例のない、危険なことをするのが好きである。
（２）生活上、人々は、個人行動が必要である。個人の自由、独立が必要である。
これは、男性性である。（捨て身の性質。自己拡大性。）
男性は、個人主義、自由主義で動くのが好きである。
（３）生活上、人々は、自分たちの生活領域の拡大が容易である。
これは、男性性である。（自己拡大性。）
男性は、自分の縄張りを大きく広げるのが好きである。

（初出2020年6月）

移動生活様式、定住生活様式がもたらす生活面での行動の強制と、男女の性差

移動生活様式者は、目新しいものが好きで新知見を得るのでなく、目新しい新知見を得る行為自体が、生活と直結していて、生活に強制されている。移動生活様式者は、新知見を、生活上の奴隷のような感じで作っている。移動生活様式者の生活は、絶えず次の新天地への移動を、望まなくてもひたすら強制される生活になっている。移動生活様式者は、一か所に腰を落ち着けることが、生活的に許されない。移動生活様式者は、生活上、新天地へと恒常的、強制的に追い立てられて、仕方なく新知見を作る。
移動生活様式中心社会における社会的価値観の分析では、以下の視点を持つことが、重要である。
（１）次の社会的価値観は、いずれも、移動生活様式を要求する環境によって強制されている。これらを生み出す過程において、人々には、精神的な自由が無い。人々は、移動生活様式を要求する環境の奴隷になっている。
（１－１）先進的思考。独創的思考。
（１－２）個人主義。自由主義。
（１－３）多数決の民主主義。

これらの分析視点は、特に、移動生活様式者の女性にとって言えることである。
女性は、本来、定住生活様式向きの存在である。
移動生活様式中心社会では、女性は、移動生活様式を要求する環境によって、男性から支配されている。
女性にとっては、移動生活様式を要求する環境が、とても劣悪で、不利である。
女性は、自分の社会的地位を向上させるには、定住生活様式の環境へ移動すべきである。
女性の社会的地位向上を目指すフェミニズムは、女性による定住生活様式の推進を主張すべきである。

定住生活様式者は、好きで、前例踏襲生活や、精神的自由の無い生活を送っているわけではない。定住生活様式者は、好きで、絶えず心理的同調や一体化、古参者への隷従をしているのではない。定住生活様式者は、好きで「集団内定住」をしているわけではない。定住生活様式者は、好きで自主的に動かないのではない。彼らは、動きたくても、定住を要求する環境に強制されて、動けない。定住生活様式者は、好きで、相互の心理的和合の維持や、満場一致をやっているのではない。彼らは、定住集団の内部が仲間割れをすると、生活が永住前

提なため、生きていけない。定住生活様式は、環境に強制されている側面がある。

定住生活様式中心社会における社会的価値観の分析では、以下の視点を持つことが、重要である。
（２）次の社会的価値観は、いずれも、定住生活様式を要求する環境によって強制されている。これらを生み出す過程において、人々には、精神的な自由が無い。人々は、定住生活様式を要求する環境の奴隷になっている。
（２－１）前例踏襲思考。
（２－２）「集団内定住」の永続。定住集団内部での言論統制。
（２－３）満場一致。

これらの分析視点は、特に、定住生活様式者の男性にとって言えることである。
男性は、本来、移動生活様式向きの存在である。
定住生活様式中心社会では、男性は、定住生活様式を要求する環境によって、女性から支配されている。
男性にとっては、定住生活様式を要求する環境が、とても劣悪で、不利である。
男性は、自分の社会的地位を向上させるには、移動生活様式の環境へ移動すべきである。
男性の社会的地位向上を目指すマスキュリズムは、男性の移動生活様式の推進を主張すべきである。

地上生活を送る生物や人間にとって、移動生活様式と定住生活様式とどちらが、より居心地がいいか？ どちらが、より快適で、生存条件がより良いか？ 人間は、環境の制約が無い場合、どちらを好むのか？
この点では、
（１）人間の中では、女性が、生物としては、基本的で、デフォルトな存在で、より優位である。女性は、定住的な性質の卵子を持つ。そのため、女性に適した定住生活様式が、人間にとっては、デフォルトである。
（２）人間は、海水内生活から陸上生活へと、遺伝的に変化してきた。人間は、生きていくために、飲み水の確保が必須である。飲み水の確保が可能な場所は、地理的に決まっている。それは、例えば、砂漠ならオアシスである。定住生活様式は、飲み水を継続的に確保できるので、生活面でデフォルトである。

生物としての人類の進化については、移動生活様式、定住生活様式と、男性性、女性性とが関連する。
（１）移動生活様式の持続と、遺伝的な精子的性質としての男性性の進化とが関連する。
（２）定住生活様式の持続と、遺伝的な遺伝的な卵子的性質としての女性性の進化とが関連する。
生活面での定住性、移動性と、男性性、女性性のどちらが、存在としてはより先行しているか？ その説明が必要だ。

社会における優位性の生成については、移動生活様式、定住生活様式と、男性性、女性性とが関連する。
（１）移動生活様式の持続と、男性性を持った人が社会的に優位になることとが関連する。
（２）定住生活様式の持続と、女性性を持った人が社会的に優位になることとが関連する。

人々は、以下の二つの次元を、混同しやすい。
（１）移動生活様式中心社会、定住生活様式中心社会の次元。
（２）男性優位社会、女性優位社会の次元。
これらは、なるべく分けて別々に説明を考える方が良い。

（初出2020年5月）

植物的思考。動物的思考。

植物栽培（農耕）と定住生活様式。動物放牧（遊牧、牧畜）と移動生活様式。

植物を栽培して主に生活する人々は、農耕民である。
動物を飼育して主に生活する人々は、遊牧民、牧畜民である。
人間にとっては、植物栽培を行う農耕が、定住生活様式を生み出す基盤になっている。
人間にとっては、動物放牧を行う遊牧や牧畜が、移動生活様式を生み出す基盤になっている。

農耕民は、その本性が、定住生活様式者である。
遊牧民、牧畜民は、その本性が、移動生活様式者である。
この両者は、対照的な性格を持っている。

人間社会では、以下の（１）の度合いが、（２）の度合いを決める。
（１）社会が、その食糧生産で、どの程度、植物栽培に依存するか、動物放牧へ依存するかの度合い
（２）社会が、その生活で、どの程度、定住生活様式中心になるか、あるいは、移動生活様式中心になるかの度合い

農耕民は、日本、東アジア、ロシアなどの民族である。
牧畜民は、欧米、アラブ、ユダヤ、モンゴルなどの民族である。

日本人は、稲作をメインとする、農耕民である。
欧米人は、ある程度、小麦栽培のような農耕をする。しかし、彼らは、牧草地を、家畜を伴って移動して生活することも多い。彼らは、遊牧民、牧畜民に近い。

人々のこうした考え方は、以下のように要約される。
（１）「植物的思考」。農耕民の考え方。定住生活様式者の考え方。
（２）「動物的思考」。遊牧民、牧畜民の考え方。移動生活様式者の考え方。

（初出2012年10月）

植物的思考と動物的思考の対比

農耕民は、植物を栽培して生きている。その思考、行動様式は、次第に植物の特性に合致する。

遊牧民、牧畜民は、動物、家畜を飼育して生きている。その思考、行動様式は、次第に動物の特性に合致する。

この両者の違いを、以下の表にまとめた。

	植物的思考（農耕民）	**動物的思考（遊牧民、牧畜民）**
P	場所。地点。	
P1	定着、定住の重視 人々は、根付き、定着すること、不動であることを重視する。人々は、抜けたり、転じたりしないことを重視する。 人々は、一ヵ所に根付いてそのまま動かずに定着することを望ましいと考える。 人々は、一つの集団や組織に入ったら、そのまま動かず、抜けずにいようとする。人々は、一つの集団や組織での終身定住を重んじる。人々は、様々な集団や組織を転々と移動する他人のことを、脱落者、根無し草として疎んじる。 人々は、一回根付いたら、そこで一生過ごすしかなく、人生をやり直せない。	移動の重視 人々は、一ヵ所に止まったままであることを好まず、あちこち転々と移動することを自然だと考える。 人々は、複数集団や組織間を転社、転職することを自然なものと考える。 人々は、いつでも、どこからでも、新天地に移動してチャレンジできる。人々は、人生をやり直せる。

	植物的思考（農耕民）	**動物的思考（遊牧民、牧畜民）**
P2	蓄積の重視 人々は、一ヵ所に定住して、財産、物資等のストックがたくさん溜まることをよしとする。人々は、動かないので、ストックを持ち歩く必要がない。	不蓄積の重視 人々は、物資等をたくさんため込むと、移動に不便である。人々は、最低限必要な財産や道具のみを持ち、その他はなるべく持たないか、蓄積しない。
P3	重さの重視 人々は、どっしり重くて、少々の風では飛ばないこと、動かないこと、抜けないこと、倒れないことを好む。 人々は、大地にどっしり根を下ろすことを好む。人々は、大地から浮かない、抜けない、浮草にならないことを好む。	軽さ、機動性の重視 人々は、軽くて、あちこち簡単に飛び回れる、動き回れることを好む。人々は、機動性に富む。人々は、地上から浮いて、あちこち高速に目標地点へ飛ぶことを好む。

	植物的思考（農耕民）	動物的思考（遊牧民、牧畜民）
P4	生え抜きの重視 人々は、 同じ一ヵ所に新芽として芽吹いてから、ずっと生え続ける。人々は、そうすると、その場所を占める力を持つ。人々は、途中、抜けそうになる苦難をたくさん乗り越えて、抜けずに頑張る。 人々は、集団や組織に、新人として加入して、ずっと定住し続ける。人々は、そうすると、その集団や組織で主導権を握れる。人々は、他から中途転入してきた者が、集団や組織を支配することを望ましくないとする。 人々は、集団や組織内部で生え抜くことで、集団や組織を支配する。	中途転入の許容 人々は、ある場所を占めるべき人は、最近になって他からやってきた人で良いと考える。人々は、その場に以前からい続けた者でなくとも、問題ないとする。 人々は、他から中途転入してきた人が、集団や組織を支配しても、問題ない。
P5	受動指向 人々は、その場一ヵ所に止まったまま動けない。人々は、環境変動に対して、動いて逃げることができない。 人々は、受け身一方である。人々は、環境変動に対して、一方的に忍耐する。人々は、マゾヒストになる。	能動指向 人々は、あちこち動き回ることができる。 人々は、環境変動に対して、動いて逃げたり、逆に攻めたりすることができる。人々は、能動的である。

	植物的思考（農耕民）	動物的思考（遊牧民、牧畜民）
P6	今いる場所・分野へのこだわり 人々は、今までいたところに止まったまま、動かないか、動けない。 人々は、新分野へと自分から進んで動いていくことがない。	新分野への進出 人々は、今いるところに止まらない。人々は、今まで行ったことのない新分野へ、どんどん飛び出していく。
P7	しなやかさ、頑丈さの重視 人々は、風雨に当たったとき、折れないようにする。人々は、柳のようなしなやかさ、幹の太さや頑丈さを重んじる。	素早さの重視 人々は、襲ってくる外敵から逃げ切る。人々は、素早さ、機動力を重んじる。
P8	大地、土地、水平指向 人々は、大地、下方向を指向する。人々は、大地から離れない水平方向を指向する。人々は、土地に執着する。	天空、垂直指向 人々は、天空を指向する。人々は、大地から離れる上方向、垂直方向を指向する。人々は、一つの土地に執着しない。
P9	視野の狭さ 人々は、ずっと一ヵ所に止まって、あちこち動かない。人々は、いろいろなところを経験することがない。人々は、物事の体験の視野が狭い。人々の視野はローカルである。	視野の広さ、グローバルさ 人々は、あちこち動く。人々は、いろいろなところを経験する。人々は、物事の体験の視野が広い。人々は、グローバルな視野を持っている。

	植物的思考（農耕民）	**動物的思考（遊牧民、牧畜民）**
P10	進行方向、目標の不明確さ 人々は、ふだん、ずっと一カ所に止まって動かない。人々は、これからどの方向に向かって進めばよいかを決定できない。人々は、方向音痴である。	進行方向、目標の明確さ 人々は、ふだん、いつも移動している。人々は、これからどちらの方向に向かって進めばよいかを、はっきり決定できる。人々は、方向感覚に長けている。
T	時間的側面（Time）	
T1	年功の重視 人々は、年を取るほど、大樹になると考える。人々は、そうなることで、有用な蓄積が多くなり、立派になると考える。人々は、年の回った回数によって、樹木や人などの価値を測る。人々は、年取った人を尊敬し、偉いとする。人々の間では、老人による支配が起きやすい。	若さの重視 人々は、繁殖能力、移動能力を持っていることを重んじる。人々は、そのため、ある程度若い個体を重んじる。人々の間では、年取った者は、子供を産めず、移動中に足手まといになるとして、疎んじられる。
T2	年少者の年長者追い越し禁止 年を取った個体が、若い個体よりも、上位である。年少者（後輩）が、年長者（先輩）を、昇進で追い越すことができない。	年少者の年長者追い越し容認 年齢と昇進の度合いが、あまり関係ない。年少者（後輩）が、年長者（先輩）を昇進で追い越すことが自然である。

	植物的思考（農耕民）	**動物的思考（遊牧民、牧畜民）**
T3	定期定型反復 植物は、毎年、季節、時計に合わせて、全く同じこと（芽吹き、開花等）を定期的に繰り返す。 人々は、農作業（田植えなど）で、全く同じ定型作業を、連続で、何度となく反復して繰り返す。 人々は、物の考え方が、型にはまったものとなる。人々は、周囲の急激な変化に対応して、考えのパターンを変えることができない。	不定期不定形不反復 動物は、定期性、定型性、反復の度合いが低い。 人々は、物の考え方が、型にはまらない、融通の効いたものになる。人々は、周囲の急激な変化に対応して、容易に考えのパターンを変えることができる。
T4	前例、しきたりの重視 人々は、ずっと同じ場所にい続ける。人々は、今まで有効だった価値観、前例、しきたり、伝統の継続を重視する。人々は、新規なアイデアを自分から考案する能力、創造性に欠ける。人々は、考え方が保守的であり、後進的になりやすい。	独創性の重視 人々は、新たな牧草等を求めて、新たな場所へと移動する。人々は、その都度、新たな事態への対処が必要である。人々は、新しい考えを生み出す必要がある。人々は、今までなかった考え方を、新たに何もない状態から生み出すことを尊ぶ。 人々は、前例、しきたりに挑戦する。人々は、進歩的、先進的な考え方を持つことができる。

	植物的思考（農耕民）	動物的思考（遊牧民、牧畜民）
T5	長期的思考 人々は、一ヵ所に長期にわたって永続的に止まる。人々は、物の考え方、スパンが長期的になる。	短期的思考 人々は、一ヵ所には短時間のみ止まる。人々は、物の考え方、スパンが短期的になる。
T6	同期へのこだわり 植物は、毎年、同じタイミングで一斉に芽吹き、花が咲く。人々は、毎年、一斉に、植物を植え、刈り取る。人々は、一斉に何か同じことをしようとする。人々は、同期性を重んじる。 人々は、同じタイミングで、新人を集団や組織に入らせる。人々は、同じタイミングで集団や組織の内部に入った複数の他人を、格差を付けずに平等に扱う。	同期意識の希薄さ 人々は、行動を起こすタイミングがあまり一斉でない。人々は、同期性に余りこだわらない。
E	その他（etc）	
E1	湿潤的、液体的 人々は、互いに近接し、一ヵ所に定着することを好む。	乾燥的、気体的 人々は、互いに離れて、動き回ることを好む。
E2	母権的 人々の間では、女性、母親が強い。 人々は、大地の母神を信仰する。	父権的 人々の間では、男性、父親が強い。 人々は、天の父なる神を信仰する。

	植物的思考（農耕民）	**動物的思考（遊牧民、牧畜民）**
E3	動物殺生の禁忌 人々は、家畜等の動物を殺生することを嫌う。人々は、そのことに慣れていない。	動物殺生の容認 人々は、家畜等の動物を殺生することに慣れている。人々は、そのことに平気である。
E4	分布地域＝東アジア、東南アジア、ロシアなど。	分布地域＝欧米、アラブ、トルコ、ユダヤ、モンゴルなど。

（初出2012年10月）

遊牧民、牧畜民の憲法。農耕民の憲法。

定住生活様式者の農耕民社会には、世界的に、共通で一般的な社会規範や価値観がある。それらの頂点が、農耕民の憲法である。
その一例が、日本の伝統的社会のルールである。
移動生活様式者の遊牧民、牧畜民社会には、世界的に、共通で一般的な社会規範や価値観がある。それらの頂点が、遊牧民、牧畜民の憲法である。
その一例が、西欧、北米各国の憲法である。

日本国憲法は、アメリカ牧畜民の社会規範を、日本の農耕民の社会規範の上に押し付けて、出来ている。
日本では、日本国憲法は、表面的には、全面的に受け入れられた。しかし、強力な女性、母親たちの抵抗で、その内容は、ほぼ骨抜きにされた。日本社会は、以前から続く、伝統的社会のままである。
アメリカ主導で日本に導入された日本国憲法は、遊牧民、牧畜民の憲法の一例である。

今の日本では、日本国憲法はただの飾りである。日本の伝統的社会のルールが、日本社会の真の憲法である。それは、女性優位社会の憲法である。

日本国憲法をもとに、遊牧民、牧畜民の憲法をまとめることができる。
日本の伝統的社会のルールをもとに、農耕民の憲法を明文化できる。

遊牧民、牧畜民の憲法は、男性優位社会の憲法と共通である。
農耕民の憲法は、女性優位社会の憲法と共通である。

（ご紹介！）男性優位社会の憲法、女性優位社会の憲法についての詳細な説明は、筆者による次の書籍を参照して下さい。
その内容は、各憲法の詳細な条文リストを含んでいます。

「Male-dominated Society and Female-dominated Society」「男性優位社会と女性優位社会」

農耕民の憲法は、どこも当初は遊牧民、牧畜民の憲法のお仕着せになる。それは、農耕民が女性優位なためである。彼らは、憲法の作成は、自分ではできない。
彼らにとっては、その作成において発生する未知のリスクが、とても怖い。彼らは冒険しない。
彼らは、自分たちの社会の内部を隠す。彼らは、表の顔として、遊牧民、牧畜民の憲法を活用する。彼らは、実際には、明文化されない農耕民の憲法で動く。

農耕民社会の日本は、「スーパー上位者」のアメリカに従順する。そうして、日本では、日本国憲法の条文は、不可侵な存在となる。農耕民社会の日本では、遊牧民、牧畜民の憲法の条文の神格化が起きている。

東アジア、東南アジアやロシアの農耕民の国家の多くは、社会主義国家、共産主義国家である。彼らの社会の社会主義、共産主義は、マル

クス主義がもとである。
マルクス主義は、西欧由来の、遊牧民、牧畜民の価値観である。農耕民の国家における社会主義、共産主義の憲法は見かけだけである。彼らは、実際には、農耕民社会、女性優位社会の伝統的なルールで動いている。

遊牧民、牧畜民の憲法と農耕民の憲法の違いは、「上位者」の概念の有無である。
農耕民の憲法は、「上位者」の概念を强力に持つ。
遊牧民、牧畜民の憲法は、「上位者」の概念をあまり持たない。
筆者は、以下で、農耕民の「上位者」の概念について説明する。
「上位者」は、国内の最高権力者たちによる集団である。それは、単独の統一権力である。「上位者」は、国民を総合的に支配する集団である。「上位者」という呼称は、農耕民の人々が、支配集団に対して、自主的に付けている。それは、「自分たちは、あなたがたに対して従順です」という意思の現れである。それは、支配集団に対する敬称である。
そこでは、実質的一党支配、大政翼賛、一党独裁が行われる。
この「上位者」の概念は、農耕民の憲法に強く見られる。この概念は、遊牧民、牧畜民の憲法では希薄である。その背後には、権力に対する男女の考え方の性差があると考えられる。

强者、権力者からの自由独立を選びたがる男性優位心理が、遊牧民、牧畜民の憲法を生む。
女性は、强者、権力者に惹かれ、なびく。女性は、彼らを敬い、彼らに一体化して従う。そうしたことを選びたがる女性優位心理が農耕民の憲法を生んでいる。
「上位者」は女性優位な心理により発生し、存続する。

農耕民の社会では、「スーパー上位者」が存在する。それは、「上位者」の更に上位に位置付けられる。それは、国外から大きな影響力を持つ国際的な强国勢力に対して、人々が付ける敬称である。
例えば、日本国内では、日本を軍事的に実効支配するアメリカが「スーパー上位者」である。

東アジアの農耕民社会における「上位者」は、例えば、以下の通りである。
（１）日本（天皇家。その使用人である役人。）

（２）中国（共産党。国の役人。）
（３）ベトナム（共産党。国の役人。）
（４）韓国（大統領。与党。国の役人。）
（５）北朝鮮（金氏一族。共産党。国の役人。）

東アジアの農耕民社会における「スーパー上位者」は、例えば、以下の通りである。
（１）日本（アメリカ。西欧。）
（２）韓国（アメリカ。西欧。中国。）

（初出2012年10月）

世界の農耕民の社会同士の連帯が必要だ

遊牧民、牧畜民の人々は、地域の垣根を超えたグローバリズムを推奨する。彼らは、あちこち移動することを重視、推奨するモバイル指向の考え方を推奨する。彼らは、自分たちの考え方を、国際標準として定着させようとする。しかし、農耕民の人々は、その戦略に乗ってはならない。その理由は、それだと、遊牧民、牧畜民の人々が、スタート地点から有利だからだ。そのままでは、農耕民の人々は、機動性に劣るので、負けてしまう。農耕民の人々には、何らかの対策が必要である。

農耕民の人々は、定位置に居を定める。彼らは、毎日、その地点について、改良を繰り返し、成果を、前例として蓄積していく。彼らは、自分たちの場所をより生活しやすい、恵まれたものにしていく。彼らは、そうしてできた好条件の位置、場所をずっと守り、独占すべきである。彼らは、そこに、遊牧民、牧畜民の人々を寄せつけないようにすべきである。
現在の世界では、欧米の牧畜民の社会が、優勢である。世界中の農耕民の社会は、それに対抗すべきである。農耕民の社会は、世界中に広く分布する。例えば、日本、東アジア、東南アジア、ロシアなどのように。世界中の農耕民の社会や人々同士が連帯することが望ましい。なぜなら、彼らは、住む場所は違っていても、互いに同じ植物的思考

や価値観を持つ同類だから。

（初出2012年10月）

私の書籍についての関連情報。

私の主要な書籍。それらの内容の、総合的な要約。

////
私は、以下の内容を、発見した。
男女の社会行動上の性差。
そのことについての、新たな、基本的で、斬新な、説明。

男女の性差。
それは、以下の内容である。
精子と卵子との、性質の差。
それらの、直接的な、延長であり、反映。

男女の社会行動上の性差。
それらは、以下の内容に、忠実に、基づいている。
精子と卵子との、社会行動上の差。

それは、全ての生物において、共通している。
それは、生物の一種としての人間にも、当てはまる。

男性の心身は、精子の乗り物に過ぎない。
女性の心身は、卵子の乗り物に過ぎない。

子孫の生育に必要な、栄養分と水分。
卵子は、それらの、所有者であり、占有者である。

生殖設備。
女性は、それらの所有者であり、占有者である。

卵子が占有する、栄養分や水分。
精子は、それらの、借用者である。

女性が占有する生殖設備。
男性は、それらの、借用者である。

所有者が上位者であり、借用者が下位者である。

その結果。
栄養分や水分の所有。
それらにおいては、卵子が上位者であり、精子が下位者である。
生殖設備の所有。
それらにおいては、女性が上位者であり、男性が下位者である。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、精子を、一方的に選別すること。
そのことで、精子に対して、受精を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、一方的に選別すること。
そのことで、男性に対して、婚姻を、一方的に許可すること。
そうした権限。

女性は、以下の行為を、行う。
そうした上下関係を利用すること。
そのことで、男性を、様々な側面から、総合的に搾取すること。

卵子は、精子を、性的に誘引する。
女性は、男性を、性的に誘引する。

卵子は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。

それ自身の内部への、精子の進入。
そのことについての、許認可。
その権限。

女性は、以下の内容の権限を、一方的に占有する。
男性に対する、セックスの許認可。
その権限。

彼女自身が所有する生殖設備。
男性による、それらの、借用。
その許認可。
その権限。

男性からの求婚。
それに対する許諾。
その権限。

生物が、有性生殖を行う限り、以下の内容は、確実に存在する。
男女の社会行動上の性差。

男女の社会行動上の性差。
それらは、無くすことは、決して出来ない。

私は、以下の内容を、新たに説明する。
世界には、男性優位の社会だけでなく、女性優位の社会も、同様に、普通に、多数存在すること。

それは、以下の内容である。
女性優位社会の存在の明瞭性。
その、世界社会における、新たな再確認。

男性優位社会は、移動生活様式の社会である。
女性優位社会は、定住生活様式の社会である。

精子。
その乗り物としての、男性の心身。

彼らは、移動生活様式者である。

卵子。
その乗り物としての、女性の心身。
彼らは、定住生活様式者である。

男性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
欧米諸国。中東諸国。モンゴル。
女性優位社会は、例えば、以下のような社会である。
中国。ロシア。日本。韓国や北朝鮮。東南アジア。

男性は、行動の自由の確保を最優先する。
男性は、上位者に反抗する。
男性は、下位者を、暴力で强引にねじ伏せて、服従させる。
男性は、以下の内容についての余地は、少しだけ残す。
下位者による反抗。
その可能性。
下位者による自由行動。
その可能性。
それらの余地。

男性優位社会は、暴力による支配を行う。

女性は、自己保身を最優先する。
女性は、上位者に対して、隷従する。

女性は、下位者を、隷従させる。

それは、以下の内容である。
//
最大限の高慢さと尊大さを、用いること。

下位者による反抗や自由行動。
それらの行動の余地を、完全に封殺して、一切不可能にすること。

それは、以下の内容である。
周囲の同調者と、予め、示し合わせて、行われること。

下位者による反抗を、一切、許さないこと。
下位者を、逃げ場の一切無い、密閉空間に監禁すること。
上位者の気が済むまで、粘着的に、行われれること。
下位者を、サンドバッグ代わりにして、一方的に、虐待し続けること。
//

女性優位社会は、専制による支配を行う。

欧米諸国と、ロシアや中国との、対立。
それらは、以下の内容として、十分に説明可能である。
男性優位社会と、女性優位社会との、対立。

移動生活様式は、男性優位社会を、生み出す。
そこでは、女性差別が起きる。
定住生活様式は、女性優位社会を、生み出す。
そこでは、男性差別が起きる。

女性優位社会では、以下の内容が、恒常的に発生する。
上位者としての女性による、以下のような行動。
自己弱者性についての、恣意的な連呼。
男性の强者性についての、恣意的な連呼。
それらは、以下の内容を、故意に隠蔽する。
女性の社会的優位性。
男性差別。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的に、隠蔽する。

女性優位社会における、その内部の機密性や閉鎖性や排他性。
その内部情報の非公開性。
それらは、女性優位社会の存在そのものを、対外的に、隠蔽する。

生物や人間の社会において、性差別を無くすこと。

その実現は、不可能である。
そうした試みは、しょせんは、綺麗事の理想の主張に過ぎない。
それらの行為は、全て無駄である。

男女の性差の存在を強引に否定すること。
性差別に反対すること。
欧米主導の、そうした社会運動。
それらは、基本的に、全て無意味である。

男女の性差の存在を前提とする、社会政策。
その展開が、新たに必要である。

////
私は、以下の内容を、発見した。
人間の本質。
それらについての、新たな、基本的で、斬新な、説明。

当方は、以下のような見方を、根本的に転換し、破壊する。

従来の、欧米やユダヤや中東による主導の、移動生活様式の思想。
それらは、人間と、人間以外の生物とを、峻別する。
それらは、以下の内容に基づく。
家畜の恒常的な屠殺。その必要性。
そうした見方。

私の主張は、以下の内容である。

人間の存在は、生物一般の存在へと、完全に包含される。
人間の本質は、以下の方法によって、より効果的に説明できる。
人間を、生物の一種として、眺めること。
人間の本質を、生物一般の本質として、捉えること。

生物の本質。
それは、以下の内容である。
自己の複製。

自己の存続。
自己の増殖。

それらの本質は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
私的な生きやすさ。
その、飽くなき追求。
それへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下のような欲求を、生み出す。
有能性の獲得。
既得権益の獲得。
それらへの欲求。

その欲求は、生物に対して、以下の内容を、絶えず生じさせる。
生存における、優位性。
その確認。
その必要性。

そのことは、結果的に、生物の間に、以下の内容を、生み出す。
社会的優劣関係。
社会的上下関係。

そのことは、以下の内容を、必然的に生み出す。
上位者の生物による、下位者の生物に対する、虐待や搾取。

そのことは、生物に対して、原罪を、回避不可能な形で、もたらす。
それは、生物を、生きにくくする。

そうした原罪や生きにくさから逃れること。
その実現。
どんな生物も、その内容は、生きている限り、決して、実現出来ない。
それは、生物の一種である人間においても、同様である。
人間の原罪は、生物であることそのものにより、生じている。

////
私は、以下の内容を、新たに発見した。
従来の生物学において主流である、進化論。
それについて、以下の内容を指摘すること。
その内容面における根本的な誤り。
そのための、新たな説明。

それは、以下のような見方を、根本的に否定する。
人間は、生物の進化の完成形であること。
生物の頂点に、人間が、君臨すること。
そうした見方。

生物は、自己複製を、ひたすら、機械的に、自動的に、繰り返すだけである。
生物は、そうした点において、純粋に物質的な存在である。
生物は、進化への意思を、全く持たない。

生物の自己複製における突然変異。
それらは、純粋に、機械的に、自動的に、起きる。
それは、生物に対して、新たな形態を、自動的にもたらす。

従来の進化論の説明。
そうした新たな形態が、従来の形態よりも、優れていること。
そうした説明は、何も根拠が無い。

現状の、生物の一環としての人間の、形態。
それが、生物による自己複製の繰り返しの過程において、そのまま保たれること。
そうした保証は、一切無い。

生物を取り巻く環境は、常に、予想外の方向へと変化する。
以前の環境において適応的だった形質。
それらは、次の変化した環境においては、往々にして、以下のような形質となる。
その新たな環境に対して、不適応であること。

その結果。

生物の形態は、自己複製と突然変異により、常に変化する。
それは、以下の内容の実現を、全く保証しない。
より望ましい状態への進化。
その持続。

////
私の、上記の主張。
それは、以下の内容である。

世界の上位を独占する、世界一の既得権益者。
そうした、男性優位社会。
欧米諸国。
ユダヤ。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらは、彼らを中心として、生成されている。
それらの内容は、彼らが、彼ら自身が有利になるように、一方的に決定した。
それらの背景をなす、彼らの、伝統的な社会思想。
キリスト教。
進化論。
リベラリズム。
民主主義。
彼らにとって、一方的に有利な内容の、様々な社会思想。
それらの内容を、根本的に破壊し、封殺し、初期化すること。

国際秩序。
国際的な価値観。
それらの決定のプロセスにおける、女性優位社会の関与の度合い。
その拡大。
その実現を、更に促進すること。

女性優位社会の内部における、根本的に生きづらい、社会的内実。
それは、上位者への隷従と、下位者への専制支配によって、完全に

満たされている。
例。
日本社会の内実。

そうした不都合な社会的内実。
その発生メカニズムを徹底的に解明すること。
その結果の内容を、暴露し、内部告発すること。
そうした内容であること。

////
私の書籍。
それらの内容における、隠れた、重要な目的。
それは、以下の内容である。

女性優位社会の人々。
彼らは、今まで、以下の内容に頼るしか無かった。
男性優位社会の人々が、彼ら自身のために生成した、社会理論。

女性優位社会の人々。
彼らが、彼ら自身の社会を説明する、自前の社会理論。
彼らが、それを、自前で持つことが出来るようにすること。
その実現。

そのことによる、以下の内容の実現。
世界秩序の形成において、現在、優位に立っている、男性優位社会。
それらの弱体化。
女性優位社会の力の、新たな强化。
私が、それを、手伝うこと。

女性優位社会の人々。
彼らが、自前の社会理論を、いつまで経っても、なかなか持つことが出来ないこと。
その理由。
それらは、以下の内容である。

分析行動そのものを、心の底で、嫌っていること。
対象との一体化や、対象との共感を、対象の分析よりも、優先すること。

彼ら自身の社会が持つ、強い排他性や閉鎖性。
彼ら自身の社会の内実を解明されることに対して、強い抵抗感を持っていること。

彼ら自身の女性的な自己保身性に基づく、強い退嬰性。
未知の危険な領域を探査することを嫌うこと。
安全性が既に確立された、前例踏襲ばかりを優先すること。

前例の無い、女性優位社会の内実の探査。
そうした行動そのものを、嫌うこと。

前例としての、男性優位社会の社会理論。
その内容を、ひたすら暗記学習すること。
それしか、能力的に、出来ないこと。

（2022年3月初出。）

筆者の執筆の目的と、その実現に当たっての方法論。

私の執筆の目的。
生物にとっての生きやすさ。生物にとっての生存可能性。生物にとっての増殖可能性。それを増大させること。
それは、生物にとって、一番、価値があることである。それは、生物にとって、本質的に、善である。それは、生物にとって、本質的に、光明性をもたらす。
社会的上位者にとっての善。それは、以下の内容である。最上位の社会的地位の獲得。覇権の獲得。獲得した既得権益の維持。
社会的下位者にとっての善。それは、以下の内容である。有能性の

獲得による、社会的上昇。社会的革命の生成による、社会的上位者の既得権益の、破壊と初期化。
その実現に役立つ思想。真実。生物が、自分自身の真実を知ること。それは、生物にとって、冷酷で厳しく辛辣な内容である。その受容。その助けになる思想。それらを、効率良く生み出す方法。その確立。

私の方法論。
上記の目的。その実現に当たっての手順。その実現に当たっての勘所。その実現に当たっての注意点。それらは、以下の内容である。
ネット検索やネット閲覧によって、環境や生物社会の動向を常に俯瞰し観察し把握すること。それらの行為は、以下の内容の源泉になる。
環境や生物社会の真実や法則の解明において、説明力や説得力のあるアイデア。
あるアイデアによって、真実を８０％説明できそうな見通しが立った場合。そのアイデアの内容を、どんどん書き出して、体系化すること。真実に近そうな、説明力の高そうな思想を、独力で、どんどん生み出すこと。その行為を、最優先すること。
詳細な説明を後回しにすること。難解な説明を避けること。
過去の前例との照合は、後回しにすること。正しさの完全な検証は、後回しにすること。
簡潔で分かりやすく使いやすい法則の確立。その行為を、最優先すること。それは、例えば、以下の行為と同様である。簡潔で分かりやすく使いやすいコンピュータのソフトウェアの開発。

私の執筆における、理想とスタンス。

私の執筆における、理想。
それは、以下の内容である。
//
私が生成する内容の説明力の最大化。
そのためにかける手間や時間の最小化。
//

それらの実現のための方針やスタンス。それらは、下記の内容であ

る。

私の執筆における、スタンス。

私が、文章の作成において、考慮する、根本的な方針。
それらの対比。
それらの主要な項目一覧。
それは、以下の内容である。

上位概念性。 / 下位概念性。
要約性。 / 詳細性。
根幹性。 / 枝葉性。
一般性。 / 個別性。
基本性。 / 応用性。
抽象性。 / 具体性。
純粋性。 / 混合性。
集約性。 / 粗放性。
一貫性。 / 変動性。
普遍性。 / 局所性。
網羅性。 / 例外性。
定式性。 / 非定式性。
簡潔性。 / 複雑性。
論理性。 / 非論理性。
実証可能性。 / 実証不能性。
客観性。 / 非客観性。
新規性。 / 既知性。
破壊性。 / 現状維持性。
効率性。 / 非効率性。
結論性。 / 中途性。
短縮性。 / 冗長性。

全ての文章において、内容面で、以下のような性質を、最初から、
最上級の形で、実現すること。

概念上位性。
要約性。
根幹性。

一般性。
基本性。
抽象性。
純粋性。
集約性。
一貫性。
普遍性。
網羅性。
定式性。
簡潔性。
論理性。
実証可能性。
客観性。
新規性。
破壊性。
効率性。
結論性。
短縮性。

その実現を最優先して、文章の内容を、執筆すること。
その内容を、なるべく早く完成させること。
その内容を、書き上げた部分毎に、直ぐに、本文に、マージしていくこと。
それらを、最優先すること。
例。
固有名詞を、使わないこと。
ローカルな、抽象度の低い意味の語句を、使わないこと。

先進的なコンピュータプログラミング技術を、文章作成の方法へと、積極的に、応用すること。

例。
オブジェクト思考に基づく、文章作成の技術。
クラスとインスタンスの概念の、文章作成への応用。
上位クラスの内容の優先的な記述。

例。
アジャイル開発の方法の、文章作成への応用。
頻繁に、以下の行動を、繰り返すこと。
電子書籍の内容の、バージョンアップ。
その電子書籍ファイルの、公開サーバーへのアップロード。

私は、従来の学術論文の作成方法とは異なる方法を、採用している。
従来の学術論文の作成方法は、説明力のある内容の導出において、非効率である。

書籍の執筆における、私の視点。
それは、以下の内容である。

統合失調症の患者からの視点。
社会における、最下位者からの視点。
社会における扱いが、一番、劣悪な者からの視点。
社会から、拒絶され、差別され、迫害され、追放され、隔離された者からの視点。
社会不適応者からの視点。
社会で生きることを諦めた者からの視点。
一番、社会的ランクが下位の病気に罹患した患者からの視点。
社会における、一番の有害者からの視点。
社会における、一番の嫌われ者からの視点。
社会に対して、生涯、心を閉ざした者からの視点。
生物や人間に対して、根本的にがっかりした者からの視点。
生物や人間に対して、絶望した者からの視点。
人生を諦めた者からの視点。
罹患した病気のせいで、彼自身の遺伝的子孫を残すことを、社会的に拒絶された者からの視点。
罹患した病気のせいで、極めて短命に終わること。そのことを、運命付けられた者からの視点。
罹患した病気のせいで、生きやすさや救いを、生涯、得られないこと。そのことが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、有能性を、生涯、得られないこと。そのこ

とが、予め確定している者からの視点。
罹患した病気のせいで、生涯にわたって、社会から、虐待や搾取を受け続けること。そのことが、予め確定している者からの視点。
そうした者による、生物社会や人間社会に対する内部告発の視点。

私の人生目標。
それは、以下の内容である。
男女の性差。
人間社会や生物社会。
生物そのもの。
それらの本質を、自力で、分析し、解明すること。

そうした、私の人生目標は、以下のような人々によって、大きく妨害された。

男性優位社会の人々。例。欧米諸国。
そうした、男性優位社会によって支配されている、女性優位社会の人々。例。日本と韓国。
彼らは、女性優位社会の存在を、決して認めない。
彼らは、男女の本質的な性差を、決して認めない。
彼らは、男女の性差についての研究そのものを、社会的に、妨害し、禁止している。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

人間と、人間以外の生物との、本質的な共通性。
彼らは、それを、決して認めない。
彼らは、人間と、人間以外の生物とを、必死で、区別し、差別しようとする。
彼らは、人間の、人間以外の生物に対する優位性を、必死で、主張しようとする。

そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

女性優位社会の女性たち。例。日本社会の女性たち。
彼らは、女性優位社会における女性の優位性を、表向きは、決して認めない。
女性専用社会や、女性優位社会における、それらの社会の内部の真実。
彼らは、その公開を、決して認めない。
そうした、彼らの態度は、男女の性差の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。
そうした、彼らの態度は、人間社会や生物社会の本質の解明にとって、本質的に、邪魔であり、有害である。

上記のような人々。
そうした、彼らの態度は、私の人生目標を、根本的に、妨害した。
そうした、彼らの態度は、私の人生を、その土台から、狂わせ、破壊し、台無しにした。
私は、それらの結果について、とても怒っている。
私は、彼らに対して、鉄槌を下したい。
私は、彼らに対して、以下の内容を、何としてでも、理解させたい。
私は、以下の内容を、何としてでも、自力で解明したい。
//
男女の性差における、真実。
人間社会や生物社会における、真実。
//

私は、人間社会を、冷静に、客観的に、分析したかった。
そこで、私は、人間社会から、一時的に、私自身を、隔離した。
私は、人間社会の俯瞰者となった。
私は、人間社会の動向を、ネット経由で、毎日、ひたすら、観察し続けた。

その結果。
私は、以下の内容を、手に入れた。
人間社会の全体を、最下位から俯瞰する、独自の視点。

その結果。

私は、以下の内容を、自力で、何とか、掴んだ。
//
男女の性差の本質。
人間社会や生物社会の本質。
//

その結果。
私は、新たな人生目標を、手に入れた。

私の、新たな人生目標。
彼らの社会的妨害に対して、対抗し、挑戦すること。
そして、以下の内容を、人々の間に広く知らせること。
//
私が自力で掴んだ、男女の性差の真実。
私が自力で掴んだ、人間社会や生物社会の真実。
//

私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍を作成している。
私は、そうした目標の実現のために、これらの書籍の内容を、
日々、熱心に、改訂し続けている。

（2022年2月初出。）

参考文献。

== 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)

Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学—男らしさ・女らしさの心理 (1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳 : 言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999

D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999.
(野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001）女の能力、男の能力
ー性差について科学者が答えるー 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah Complex,Dodd,Mead
&Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン＝デリラ・コンプレックス
ー夫婦関係の心理学ー,社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。
E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理―若い女性のために
(心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1
// 女性単独。
扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき~女性SE奮戦記, 技術評
論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-
dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex
differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of
object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning.
Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex
Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56,
No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior
spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis.
Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of

three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual differences in

cognitive abilities and brain organization,Part I: sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104, No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern. Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences in incidental recall for words and pictures. Learning & Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in normal children. Developmental Medicine & Child Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children. Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between hand preference and the performance of individual finger movements by left and right hands. Brain,93,769-774
Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction between speaking and sequential manual activity. Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex. Journal of Applied Psychology,52,10-15.
Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid "automatized"naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of

th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656
Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.

大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.
Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年－第５回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New

York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

== 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。
/ 一般。
富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。
和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄ー日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房
松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代—ヨーロッパからの発想 (角川選書) , 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人

類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂，1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論—クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館，1970.

J・J・バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。

大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討 : 異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31
浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。

千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から—比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界—自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1
志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。

Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995,（H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1）
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures.

Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典—世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

== 男性優位社会。移動生活様式。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業 就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所：西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書) , 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法—ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考—日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本—その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。
// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press（久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社）
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法—留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1

リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱―豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985
八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源—イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別—, 経済学論纂（中央大学）第60巻第５・６合併号（2020年３月）,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/
Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ—イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書，1991．
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化−その根柢にあるもの , 岩波書店, 1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心—モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1

// 社会間比較。

== 女性優位社会。定住生活様式。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K・A・ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論ー明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保, 「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著), 「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著), 「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948（長谷川松治訳, 菊と刀ー日本文化の型, 社会思想社, 1948）
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人ーユニ―クさの源泉ー, サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc.,（ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1）
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータ―ス (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい—知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリ―ン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について——日本社会論ノート（3）」（『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社）
木村敏, 人と人との間－精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂
丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケ―ション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質—日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村—国の政策と農村社会の変容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。
鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検［三訂増補版］—地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化－同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1

教育社 (編集), 官僚—便覧 (1980年) (教育社新書—行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政—ウチのルール (自治選書), 第一法規出版, 1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚—その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導—官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革—談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。
間宏,日本的経営－集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。
大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ—進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学—戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks（松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋）

/// 性差。
//// 母性。母親。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母—文化としての母の観念についての研究, 東洋館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論—「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1
山下 悦子 (著), マザコン文学論—呪縛としての「母」 (ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち—企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国—家庭内“校則”に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語—イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚—破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。

山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人—異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。
高野陽太郎、纓坂英子, " 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」かー特殊論を超え多元的分析へー, 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社，1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本ーニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, ー科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれないー日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 （占部都美 監訳 「日本の経営」 ダイヤモンド社 1960）
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育—日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女—逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較ーかくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。
杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, —われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典—衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ! 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社, 2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ) 中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后—大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公

論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙—中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係 : 記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識－民族意識から国民意識への展開－, 札幌法学 29 巻 1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論—精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本: 民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ――家族形態の比較――, 法経

研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第５巻（2012年11月）—— 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考,『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）——, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン—非近代社会の心理と行動 (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

== 液体。
/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発—基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日
http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。

大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

== 生物。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】，日高敏隆，岸由二，羽田節子，垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー―個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1
/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学―適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1
山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn't train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical

Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.
Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」 1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生物。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動ー現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか―心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書―NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書―NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫，1990 (1966).

河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1
伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である—宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

== 辞書。
新村出（編著）,広辞苑－第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

== データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日
http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活様式。定住生活様式。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生物の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう!

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生物や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生物の機能主義。生物としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生物。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生物にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論－強い母の社会。事例としての日本社会。－

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual -The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　ー要素還元アプローチー

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для

противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination. They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。それらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます!

私は本の内容を頻繁に改訂しています。

そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。
私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。

Table of Contents